

ある羅浮山に到着爲無い前に、途中で何處へか忽地消え失せて了つたので、彼を見送つた中使は中途から京都へ引返して了つた。其後間も無く南海の地方から急使があつて、軒轅集が無事に羅浮山に歸て來たことを上奏して來た。

鄭全福

鄭全福は江西浮梁の人で、唐の文宗の時新安の靈洞に入つて仙道を修煉して居た。其後蓮華洞に住み、時々附近の桃花溪に出て遊んで居た。

或日彼は例の如く、獨り桃花溪の邊りに遊んで居ると、其處へ一人の老人が一艘の鐵船に乗て上流の方から下つて來た。彼は件の老人に自分も一所に其船に乗せて蓮華洞へ歸らして呉れないかと尋ねると、件の老人は頭を振て、今年經つた後再び此處へ來い、左様したら此船に乗せて遣らうと言棄て、其儘何處へか立去て了つた。其時鄭全福は己に百歳を超えた老年であつたのである。

鄭全福將に死うとした際多くの弟子を集め、自分が死んだら浮梁の白水といふ處に葬て呉れと頼んであつたので、彼が卒した時、弟子共は遺言通り彼の死骸を棺に入れて白水といふ處へ持運んで行くと、途中で棺が俄に輕くなつたので

怪んで棺の中を檢めて見ると、其中には唯杖と履のみが有る計りて、彼の死骸は己に消え失せて居た。

侯道華

侯道華は芮城せいじょうの人である。中條の道靖觀に到て周悟仙といふ者に從て道を學んだ。

彼が平生の行業は恰て狂氣きやうきじみて居て、如何な險しい山崖がけでも平地のやうに驅け廻て居た。而して又彼は平生經書及び歴史の書類を好んで、暫時も手から放したことはなかつた。

然るに或日道靖觀の屋根が毀損したので、屋根へ上て瓦を修繕して居る中、彼は不圖瓦の間に一個の小さい金製の合ごを發見し、怪んで蓋を開て見ると、中に仙丹が入て居たので、其物をとつて服した。處が其後數十日經て、或日庭前に聳えて居た松の梢に攀登り、其處から鶴の脊に載て空中を此處彼處と飛廻て居たが、暫時經つと、其儘天上へ飛去て了つた。そして其後再び天上から降て來て、自分は上帝から仙台郎の役を仰せ付けられて居ることを或人へ話してあつたさう

である。

劉 暗

劉暗幼名を宜哥といひ唐の代の人である。家が貧乏で書を購ふことが出来なかつたけれど、彼は種々の困難を排して仙道を勉強した。兄の膽が之れを見て、神仙の道は遠慮であつて却々熱達することが困難である。然るに任官の道は割合に手近で成功し易いから、任官の方を求めたら宜いでは無いかと頻りに説教めたけれど、彼は頑として應じなかつた。

然る處或日一人の道士が劉暗の許に遣て来て、彼を羅浮山に連れて行つたので、彼は以後其處に留て仙道を修煉して居たが、終に其秘訣を授けられた。

扱て彼の兄の膽は其後進士の試験に及第して登庸せられ、次第に昇進して宰相の榮職に就いたけれど、其後罪を得て都を落延び、湖臺といふ處で舟の中に淋しい一夜を明かしたことがあつた。其時弟の暗は兄の災禍に逢ふた事を聞て、折柄の強い雨を冒して湖臺に赴き兄に面會して厚く其不遇を慰めると、膽は年も甚く老つた上、是迄積つた多年の心勞の爲めに、頭髮が悉く眞白になつて居る

譚 峭

三七六

に反して、弟の暗は年も可なり老て居るにも拘らず、顔色が艶々して、恰も少年のそれと少しも變らないのを見て、彼は今更弟の身を羨み、曩に自分が仙道を修めなかつたことを熟々後悔し、今から仙道を修煉しても遅くはあるまいかと弟に尋ねた。其時暗は仙道と世間道とは全く其性質を異にして居るので、今から修行し初めた處で、恐らくは其効果を見ることが出来ないと答へた。

扱て其夜は兄弟互に睦しく物語り明かし、翌日互に身の健康を祝して別れて了つたが、弟の暗は其れ限り其行衛が分らなくなつて了ひ、兄の膽は竟に其譎所で一生を過した。

譚 峭

譚峭字は景升といひ、唐の國子司業洙の子である。幼少の時から才智秀て、經史等一度目を通したものは悉く其要點を誦んじて居た。父の洙は經學を學んで進士の試験に應ずるやうにと頻りに説き勧めたけれど、彼は唯黄老の道を好んで一心に其れ計りを研究して居たので、兩親も彼が志堅くして容易に翻さすことが難しいのを見て、遂に彼が好む儘に任して居た。

譚 峭

三七七

其後彼は終南山に遊び、其れから嵩山の道士等と相往來して居て、避穀養氣の術を修むると前後十餘年、平生酒が好きで、錢さへあれば酒屋に入つて居た。そして夏は黒い皮裘を着、冬は緑色の布衫を着、そして寒風強く吹く冬の日に積雪の中に寝て居るなど、随分人に異つて居た。そして彼は路を行く時に常に次のやうな詩を吟して居た。

線作長江扇作天。靴鞋拋在海東邊。蓬萊信道無多路。暑在譚生拄杖前。

其後彼は南岳に登て其處で仙丹を煉て居たが、其丹藥愈出來上つて之れを服すると、それから水に入ても身體が濡ること無く、火に入ても手足が焼けるやうな事がなく、其外種々の不思議な奇術を演じては人々を驚かして居たが、其後は青城山に登て其處で仙化して了つた。

葉千韶

葉千韶は字を魯聰といひ、建昌の人である。幼少の頃から西山の道士に従て十二真君の道術を學び、一切の五穀を斷て只氣を服して居た。

或年獨り山中の庵室に坐て居ると、俄かに大雷雨が降て來て、一人の白衣を着

た道士が忽然として彼が前に現はれた。そして彼に向て其道術已に成就して、彼が名は今や仙籍に登録されてあるから、以後は専ら鬼神を使役して恰ねく人民の艱苦を救ふて遣るがよいと告げ、尙ほ彼に天書を授けて立去つた。

其處で彼は香を焚いて件の天書を讀んで見ると、それは恰も兵書のやうな物であつた。是れから彼は風雨を呼び鬼神を驅使すること自由自在で、如何な難病でも彼が手に懸れば直ちに平癒しない者は無かつた。

其後彼は恰ねく天下を遊歴し、人民の艱苦を救ふて居た。處が唐の咸通年間濠州といふ處の刺史に劉昉といふ者が居て、風の疾に罹つて幾ら治癒を施しても少しも效驗が無かつたが、千韶の名を聞て一日彼の治癒を乞ふと、彼は神符三枚を取出して其れを肩脅眼の三個所に貼り、斯様にして風を脚の方から追ひ出すのであると言て居たが、果して暫時すると一種の冷い氣が脚の方から次第に脱け去るやうな氣持がして、數日たつと、件の病氣は跡形もなく平治して了つた。其後彼は其處を立去て西山へ上つたが、其切り再び其姿を見せなかつた。

麻衣仙姑

麻衣仙姑は汾州の人で、姓は任といひ、石室山に隠れて居た。其處で彼の家人共が種々と彼の踪跡を探し求めたけれど、遂に捜し當ることが出来なかつたが、或日前記石室山に於て偶然彼に出逢ふた者があつて、驚て彼の棲家を問尋ねると、彼は一言も答へず、直様身を躍らして側の壁のやうに突立つた岩石の中へ入ると見ると、岩石が自然と口を開て彼を中へ押籠み、忽ち雷のやうな恐ろしい響と共に、岩石が再び其口を閉ぢて、舊のやうになつた。而して其時岩石の上に印した彼の足跡は、今日でも尙ほ明かに残て居るといふことだ。

爾朱洞

爾朱洞は字を通微といひ、其先祖は元魏の爾朱が族から出たといふことだ。幼少の時一人の異人に逢ふて、還元抱一の道を傳へられ、其處で自ら號して歸元子と稱し、最初は蓬山に隠れて居たが、其後蜀漢の國々へ出て藥を賣て居た。平日路を歩むに非常に迅く、殆んど飛んで居るかと思はるゝ位であつた。そして

又平生猪の血を入れた酒を好み、醉へば則ち詩を吟しながら、山の上、水の涯を徘徊して居た。

彼が極く懸念にして居た或旅館の主人が、夜になると毎度も彼の室で異しい聲が爲るのを訝しく思ひ、或晩密と之れを窺ふと、それは朱洞が榻を傳へて天井へ上り、棟の處に到ると暫時其處に停り、やがて復た下へ降りては再び前のやうに幾回も繰返すので、それが爲めに一種異様な響を出すのであることが分つた。此處に或人があつて、或日或野原の荒地に捨てられた人間の骸骨の中に、雀の卵のやうな奇妙な物があるのを發見した。て、其物を家へ持歸つて、是は何であるかと爾朱洞に尋ねて見ると、之れは陰の氣が凝結したものであるとのことであつた。一體神丹を服しても、若し其神丹が充分煉れて居なければ、陰の氣は其對手たる陽の氣と一所に作用をなすことが出来ぬから、單獨に剝離して、丹田の處に鬱積し、終に石のやうに凝結して了ふ。そして此物を若し女子が飲めば、一種畸形の小兒を産むといふことである。

唐の末年王建が成都を攻め圍んだ時、城が容易に陥らなかつたので、王建は大に氣を焦立ち、愈、此城が陥落した時は、城中の奴等一人も残さず誅戮して了ふ由

を言觸らした。處が城の太守此事を聞て大に心を痛め、自分の爲めに罪もない人民迄害を受けさすを心配して居る時に、爾朱洞フト此事を聞て彼に心配するに及ばぬ由を告げ、早速庭前に壇を築て暫時祈禱し居ると、扱て此方の王建の軍中に於ては、其日夕方一人の神人が黒雲に乗て現はれ出て、王建を見て、吾が民に害を爲す者あらば、立處に神罰を蒙らして遣るぞと叱つたので、道の王建も大に怖れ、厚く其罪を謝して即時に兵を收めて其處を立去つたので、成都是幸に無事なることを得た。

其後朱洞は或市に出て丹藥を賣て居たが、一粒の價は錢十二萬である。時に太守の某といふ者會、其店先を通して其藥を買うとすると、彼は太守は高貴の身分であるから、一粒の價一百二十萬でなければ賣ることが出来ぬと言つたので、件の太守は大に怒り、早速彼を召捕へて竹籠の中へ入れて川の底へ深く打沈めた。其處で彼は水に押流されながら涪凌の上流迄到ると、其處に二人の漁夫が居て、此日會、舟を浮べて網を投げると、朱洞は其網へ懸て水の上へ引揚げられた。

其時件の漁夫共は彼を見て大に驚き、必定是は仙人の類で今入定して居る處であらうと思ひ、銅缶を叩いて彼を呼び起すと、朱洞は少頃して眼を開き、二人の

漁夫を見て、此處は何處である、銅梁迄は幾程あるかと尋ねた。すると漁夫共は我々は此附近の白石江の者共で、此處から銅梁迄は殆んど四百里程あらうとして、此處から東の方は即ち豐都縣で、平都山の仙都觀は即ち其地にあると云て指して精しく教へた。

初め爾朱洞が師の異人と別るゝ時、異人から三都といふ處で白石が水に浮ぶのを見たら、其は即ち汝の昇天する時であると教へられてあつたので、其後河のある處に到る度に、白石を水に投じて浮くか沈むかを檢べて居たが、彼の心を知らぬ人々は唯彼を以て石を投げて戯るゝものとのみ思ふて居た。然るに今會、漁父が豐都縣、平都山、仙都觀の名を呼ぶのを聞て、フト彼は異人の言葉を思出し、所謂三都とは即ち此地を指して云ふのかも知れんと心付たから、試に小さい白石を拾ひとつて河の中へ投げ込むと、果して件の石は水に浮んで下の方へ流れて行つた。之れを見て朱洞は我が昇天の時機愈々來たと云て、獨り心の中に喜んで居た。扱て彼は漁夫共に扶けられて岸へ上り、何心なく件の漁夫共の顔を覗ると、不思議や彼等の顔の上に、何處となく一脉の仙氣が漂ふて居るのが見えたので、汝等の相貌を視るに普通の面魂ではない、察する所、必らず異人に逢ふて多

少道を聞たことがあるだらうと星を指されて、件の漁夫共は不勘驚いた様子であつたが、暫時して彼等が其昔海上の仙人に隨て三一の法理を學び、以後今日まで引續て陰陽の二氣を煉ることを修めて居る由を白狀した。

其處で朱洞は大に喜び、一所に或酒店へ行て酒を飲み、仙丹をとつて各其半分を頒ち服した後、附近にある或荔枝園の中へ驅け込んで、三人一所に昇天して了つた。

陳搏

陳搏字は國南といひ、又扶搖子とも號して居た。亳州真源の人で、生れて四五歳になつた時、始めて漸う言葉を發することが出来た。初め彼は濁水といふ河の邊に遊んで居ると、其處に一人の青衣を着た老媪が居て、彼を懷の中へ抱上げて乳房を含ませて遣ると、是迄一言も發することが出来なかつた彼は、不思議や

究盡してあつたと云ふことだ。そして親を喪つた時、彼は是迄學んだ所のものを悉く棄て、不老不死の道を究めんと志し、家財道具を悉く賣拂ひ、唯一個の石籠のみを持って家を出たが、久しからずして道進み、名聲漸く天下に聞えるやうになつた。

唐の明宗皇帝或年詔を下して彼を朝廷に召された時、彼は朝廷へ來ることは來たが、皇帝に謁しても敢て禮拜しやうとも爲なかつた。然し皇帝は厚く彼を遇し、陳

た上官女三人を賜はれた。其時其恩遇を謝した彼の詩に曰く、
雪爲肌體玉爲腮
多謝君王送得來
處士不與巫峽夢



陳搏
空煩雲雨下陽台。

三八六

而して彼は此詩を件の三人の官女に添へて、一所に朝廷へ送り返さしめ、其身は其儘朝廷を遁れて己が棲家である武當山の九室巖に歸て來た。斯くて彼は此九室巖に棲むこと前後二十餘年間で、年七十餘になつた時其處を引拂て華山へ移り、門を閉ぢ、客を謝し、數月間一步も外へ出なかつた。

周の世宗皇帝の顯徳年間、或處に一人の樵夫が居て、或日華山の麓で塵の中に埋れて居た一個の死骸を見付けたので、驚いて其物を掘起して視ると、それは即ち陳搏であつた。而して暫時經つと彼は自ら起上り、人が快い氣持になつて寢て居る所を何故起して呉れたかと云て、彼は大層腹を立て、あつたさうである。宋の太祖、帝位に即かれた時、彼之れを聞て大に喜び、天下恐らく是れから太平になるであらうと言てあつた。初め彼が太祖から召されて再三使を受けたけれど、常に剛情を張て聽入れず、自分は山に棲む世捨人、山中の白雲は即ち自分の最も親しい伴侶である。此の如き親しい友を棄て何處へ行かうとの心は、微塵も無いと言て、堅く其使を拒絶して居た。然し太祖が薨して太宗が位に即いた時には、一度其召に應じて朝廷へ詣つたことがあるけれど、其時は唯靜な一室

を請受け、皇帝から建隆觀を賜はられると、彼は平生室の中に寢て計り居て、一月經つと、或日突然起上り、其儘皇帝に暇を告げて、直ちに山へ歸て了つた。其時皇帝は彼に希夷先生の號を賜はられた。

彼は最も易學のことに通じて居て、人物の鑒定には極めて秀でて居つた。曾て唐の政が亂れて諸所に兵亂が起り、宋の太祖の母が當時猶ほ孩兒であつた太祖及太宗の二人を籃の中に隠して某處へ兵難を避けた時、陳搏途中で件の親子に遇ひ、之れを見ると忽ち口を開て笑ひ出し、莫道當今無天子。却將天子上擔挑。と二句を吟じてあつたが、果して太祖は終に天下を一統して宋の國を建てられた。其後太祖太宗の二帝が臣下の趙普と一所に微行して長安の市に出て遊び、圖ある酒屋の樓上で偶、陳搏と出遇ふた時、陳搏は趙普が太祖太宗の側に坐て居るのを見て、汝は紫微宮の中にある一の小さひ星である、それに皇帝の次席に坐て居るとは身の程知らぬ潛越者であると云て、痛く彼を責めたことがある。又或日のこと、周の世宗皇帝と宋の太祖が共に連れ立て一所に何處かへ微行することがあつた時、會々陳搏は家の中に在て書を讀んで居たが、フト傍の人々を顧みて、唯今城外に二つの天子の氣が立上て居る。察する所二人の天子が其處を

支那仙人列傳

通過されて居るのであらうと言つたが果して然様であつた。此處に種放といふ者が居て、陳搏に従て道を學はれたが、或日陳搏彼に向て、汝の人相を觀るに、後日明主に召抱へられて天下に名を成すに到らうが、然し汝が漸く天下に名を知らるゝ頃になると、思はぬ災禍が降つて湧て終に身を滅すことがあるから、能く／＼氣を注けたがよいぞと、堅く戒めてあつた。其後果して彼は唐の太祖に仕へて大功を顯はしてあつたが、不圖した失策から遂に其身を完ふすることが出来なかつた。而して種放が死骸を葬る時、陳搏は其場所を豹林谷に卜定し、後世彼が子孫の中には代々名將が出て、其家名を揚げるであらうと豫言してあつたが、種放は子が無かつたので、其甥の世衡を養ふて後嗣とした。然るに果して其子孫は代々時の大將となつて世に重んぜられてあつた。

陳搏の弟子に陳堯咨といふ者が居て、進士の試験に及第した時、陳搏の許へ行て面會すると、其座に一人の道人らしい者が居て、堯咨を見ると、續け様に南庵々々と呼んだ。暫時して件の道人が暇を告げて辭去つた後、陳堯咨陳搏に向て唯今の道人は何人であるかと尋ねると、それは鍾離子であつたので、彼は餘りのことに暫時は茫然として居たが、やがて直に起上て其跡を追ひかけやうとすると、

支那仙人列傳

陳搏は急に彼を押留め、道人は最早數千里の先へ行て居るから、今から追掛けても駄目であると言つた。其處で堯咨は重ねて然らば南庵とは何の意味であるかと問尋ねると、陳搏はそれは後日になつて自ら悟る時があらうと言て、審しく教へなかつた。其後陳堯咨は閩中といふ處へ行つたことがある。其時不圖或村落を通ると、其處に一人の百姓らしい婦人が居て、南庵へ行つて早く父親を呼迎へるやうに其子供に吩咐て居るのを聞て、不審に思ひ、南庵とは如何なる處であるかと彼の婦人に尋ねると、それは一の廢れた伽藍で、其境内に一基の碣がある。其上に某年某月某日南庵主人卒と記してあつて、其月日を能く／＼考へて見ると、それは即ち彼が生れた年月であつて、自分は即ち其南庵の後身であるといふことが始めて分つた。

此處に華陰といふ處に郭沆といふ者が居て、或夜觀下といふ處に滞在して居ると、夜半突然陳搏が遣て來て、急ぎ今から故郷へ出立するやうに告知らし、自分も一所に連立て一里計り來ると、會途中で一人の飛脚に出逢つた。そして其者の云ふ處を聞くに、華陰に居る郭沆の母が卒に死んだといふ報知であつた。其時陳搏は郭沆に向ひ、自分が今夜汝を無理に誘出したのは全く此變事がある爲

めてあると言て、一包の薬を與へた。其處で郭沆は急いで家へ歸るや否や、先づ件の薬を母の口へ灌ぎ込むと、母は忽ち蘇生して復た舊の如く起上つたさうである。

此處に華陰の役人に王陸といふ者が居て、或日陳搏に向ひ、先生が住んで居る溪巖と云ふ處は如何な處であるかと問尋ねた。其時陳搏は顔に微笑を含んで次のやうな詩を示した。

華山高處是吾宮。坐即凌空跨曉風。台樹不將金鎖開。來時自有白雲封。

或日一人の客が陳搏の許へ訪ねて來た。其時陳搏は會、晝寝をして居て、彼の側には一人の異人が坐して居り、頻りに彼の呼吸を測て、それを一々紙の上に書き記して居るのを見て、件の客は怪んで其故を尋ねると、其異人は斯う答へた。今先生は華胥の國へ赴いて混沌の音楽を調べて居らるゝのであるから、それを今寫しとつて居るのであると。

陳搏或日某處で偶然毛女に遇ふた。其時彼女は彼に次の如き詩を贈つた。

藥苗不滿筒。又更上危巔。回指歸去路。相將入翠烟。

唐の太宗陳搏が人を相るに熟達して居ることを聞て、或日彼を朝廷へ呼寄せ

南衙に居る眞宗の許へ行て其身の上を鑿相せしめると、陳搏は眞宗の門の際迄行くと、其儘直ちに引返して來た。如何した故かと尋ねて見ると、眞宗の下に仕へて居る人々は、何れも皆一廉の大將や宰相となるべき者のみであるから、今更事新しく王を相るに及ばぬと言つたので、太宗も大に安堵し、早速眞宗を以て皇太子と定められたさうである。

端拱元年陳搏或日多くの弟子を集めて、來年の中元を越すと、暫時峨嵋山に遊んで來る由を告げ、其翌年門人共を遣して張超谷といふ溪の邊に一個の石室を鑿らしめ、それが愈々落成した時彼は早速其處へ移住し、而して自分が仙化する時の有様を洽ねく門弟子共に見せて遣らうと言て、終夜燭火を點して室を照さしめ、扱愈、仙化する時刻に臨むと、彼は左の手で顔を支へ、靜に座つた儘忽ち息が絶えて了つた。年は恰度一百十八歳である。然し七日経ても其容色少しも變らず、肢體に觸れて見ると未だ温氣を帯びて居た。そして其夜五色の雲が空から下りて來て、谷の口を封鎖し、一月の間も散じなかつたさうである。

陳搏の易學は穆伯長之れを繼ぎて李挺之に傳へ、李挺之は又之れを邵康節及び种放に傳へ、种放又之れを廬江の許堅に授け、許堅は之れを范諤に傳へ、斯くて

それが後世迄継ぎくゝに傳へられたのである。

針玄英

支那仙人列傳

針玄英は燕の國廣陵の人で、海蟾子と號して居たが、最初は操といひ、後仙道を得てから玄英と名を改めたのである。曾て燕の太守劉守光に仕へて宰相となつて居たが、平生厚く黄老の道を好み、長生不死の術を喜んで居た。處が或日一人の道人が彼の許へ訪ねて來て自ら正陽子と稱し、清静無爲にして心身を養ふと、及び金液還丹を煉るの法を彼に授けた。而して其時件の道人は玄英に請ふて鶏卵十個と錢十文とを借受け、一文の錢を机の上に置き、其上に件の十個の鶏卵を重ねて塔の形を造つた。玄英之れを見て大に驚き、危い々と叫ぶと、彼道人は莞爾と微笑み、今榮華榮耀に誇つて居る人々の危険なことは、之れよりも幾層倍であるか殆んど測知ることが出來ぬと答へ、そして錢を以て件の鶏卵を悉く打碎き、其儘暇を告げて何處ともなく立去て了つた。

玄英之れを觀て大に悟る處があつたので、其夜家族を一室の中に集めて酒宴を催し、貯藏して置た財寶を悉く其處へ取出して打碎き又は燒棄てさせ、翌日早

支仙仙人列傳

速官を辭して終南山の麓に一の小さな家を作り、自ら獨り其處に移住んで居たが、或日代州の鳳凰山の壽寧觀に赴き、壁の上に龜鶴齊壽の四字を書き記した。そして又之れと同時に、代州から西蜀に到る凡そ數千里の間に、幾何と無く諸方に散在して居る各道觀に其身を現して、其門の壁の上に件の四字を書き記してあつたが、是れは仙道の一秘術たる分形散影の法を行ふたのである。

其後彼は仙丹を煉て尸解仙化する時に臨み、彼の腦天から一道の白氣が立上るよと見えたが、彼は忽ち一羽の鶴となつて何處へか飛去て了つた。而して、元の至元六年明悟弘道真君の尊號を賜はられた。

馬湘

馬湘字は自然といひ、其先祖は鹽官の人である。彼の家は代々小録の官吏であつたが、彼は幼年の時から學を好み、詩文にも堪能であつた。そして或年友人と一所に諸國に遊んで、遍く名所舊跡を尋ねて居た時、湘州といふ處で酒に酔ふて雲溪といふ谷に墮ち、數日経てから漸く岸へ上て來て、そして人に語ていふやう、自分は溪の底へ行て楚王の項羽に會ひ、一所に酒を飲んであつたが、其時自分

支 那 仙 人 列 傳

は誤て拳を伸すと、それが自分の鼻の孔の中へ入つた。驚いて拳を引抜くと、鼻は又舊の通りに直つて別に何處も傷んだ處も無かつた。

此事があつた後、彼は種々の奇術を行ふやうになつた。例へば溪の水を指すと、其水が上の方に逆流し、又岸に植ゑられて居た柳の樹を指すと、其柳が水流に沿ふて往つたり來たりする。又橋を指すと、其橋が中途から二つ三つに切斷して、暫時經つて復た舊の態に復する。又此處に病に苦んで居る人があつたが、彼が其病人の側へ行て、竹の杖で其痛む所を打ち、又は杖を以て其處を指した後、口を杖の頭に當て之れを吹くと、忽ち雷のやうな大きな響が爲て、病が同時に亦癒て了ふのである。人若し此際に金錢や品物等を御禮に贈ることがあつても、彼は決して受取らない、無理にそれを受取らしめると、彼は其物を他の貧乏な者に施し與へて了ふ。

彼は自分が一度遊覽した宮觀の巖洞へは、必らず一首の詩を題して居つたが、曾て杭州の秦望山に上つた時の詩に次のやうなものがある。

太一初分何處尋。空留歴數變人心。九天日月移朝暮。萬里山川自古今。風動水光香遠徹。雨添嵐氣沒高林。秦皇漫作驅山計。滄海茫茫轉更深。

支 那 仙 人 列 傳

杭州に彼の兄が住んで居るので、或年久振て兄の許を訪ねると、兄は其時外出して家に居らなかつたので、留守をして居た嫂に向ひ、此宅の半分を自分に讓て呉れまいか、自分は唯東の園が欲しい丈けてあると言ひ、そして嫂が出して薦めた御馳走は一口も手を附けず、唯酒計り飲んで居た。そして兄の許に三日程滞在して居たが、兄が未だ歸て來ない中に俄に死んで了つた。然るに其翌日になつて兄が漸う歸て來て、斯くと聞くや、弟は多年の間仙道を學んで居たが、今度といふ今度は、愈、仙化する爲めに態、此處へ遣て來たのであらうと言て、早速彼の死體を棺に入れ、彼が所望した東園に葬つた。それは恰も大中十年のことである。處が其明年になつて、東門といふ處から一人の使者が見えて、梓潼縣の道士馬自然が今日白晝に昇天したことを皇帝へ上奏したので、早速使者を杭州の兄の許へ遣して馬湘の棺を發いて見ると、其中には唯一本の竹杖が殘て居るのみで、彼の死體は已に消え失せて居た。

張九哥

張九哥は宋の慶曆中の頃の人で、京都に住んで居たが、寒い冬の最中でも單衣

一枚で居た。燕の太守彼が名を聞いて一日彼を朝廷へ呼寄せ、一所に酒を賜へて種々仙道のことなど問尋ねてあつたが、或日九哥突然王の許へ遣て来て、自分は今遠い所へ遊ばうと思つて居るので、其暇乞の爲めに參上したことを告げ、尙ほ自分の奇術を王の御覽に入れようと言つて、羅を幾重にも折疊んで其物を蝶の形に切刻むと、其羅が一枚々々彼の手を離れて飛び去り、空中にあつてヒラ／＼と飛び舞ふ状は實に美事であつた。而して少頃して其物を一々呼び返すと、件の羅の片は一つ／＼彼が手許へ舞ひ戻り、復た元の如く一枚の大きな羅となつた。

其時太守は彼に向つて、自分の壽命は此先なほ何程あるかと問尋ねた時、彼は開寶寺の佛殿と齊しからんと答へてあつた。すると其後件の寺は或日火災に逢ふて焼けて了つた、と同刻に王も亦卒に薨して了つた。

侯先生

侯先生とは何處の人であるか、詳でない。宋の大中年間京都で藥を商ふて居たが、其頃年は四十歳以上で、顔は眉毛も鬚も無く、ツツベリして居て、肌體には一面に癩贅が出て居た。平生酒が大好で、錢さへあれば必ず酒を飲み、醉へば即ち乞丐と一所に町端の叢の中や、橋の下等に寝て居た。

此處に馬元といふ男が居て、或年の夏彼に従て城門を出て市外へ遊びに出た時、侯先生は園ある池の中に入つて水浴を爲た。其時馬元は獨り池の傍に留て居て、何心なく池の中を視渡すと、其處に侯先生の姿が見えないで、唯一匹の大蝦蟇が大きな眼を光らして彼を睨んで居たので、彼は驚いて後へ引返して來ると、間もなく侯先生が衣を着て出て來た。其れから二人は園ある酒屋へ入つて酒を飲むと、侯先生は一粒の藥を取出して馬元に與へ、之れを服すれば百歳までも長生すると致へて、其日は其處で二人は別れて了つた。其後侯先生の行衛少しも分らず、數年は夢の如く經て了つたが、或日蜀の國から歸て來た或人の話によると、侯先生は蜀の國の都に在て藥を賣て居たといふことだ。

費孝先

費孝先は成都の人である。宋の至和二年に青城山に遊んだ時、路を誤つて一軒の村莊のある處へ出た。其時件の家から一人の老人が出て來て、彼を門の内へ誘ひ入れて座敷へ案内した。而して孝先が竹の床の上を通る時、如何した

支那仙人列傳

機か誤て床を少し踏み破つたので、彼は大に驚いて、主人にその疎忽を詫び入ると、主人はカラ／＼と笑て、作つた物は毀れるが至當である。君がそれを壊したと思へば氣の毒にも感ぜらるゝだらうが、其床が君によつて壞さるべき運命をもつて居るものと思へば、何の憾も無い道理ではないか、まあ試みに其床の竹を一本抜きとつて見るがよいと言つた。そこで彼は、不思議な事を言ふ老人とは思つたけれど、彼が言ふ儘に床の竹を一本抜きとつて裏を視ると、其處に小さい文字で某年某月某日之れを造る、某年某月某日費孝先の爲めに壞さると明記してあつた。而して更に其年月日を計算して見ると、其床は今から二百年も前に作られた物であつた。

是に於て彼は件の老人の普通の者で無いことを悟り、其れから志を改めて件の老人に附従ひ、易の秘訣を授けられて、遂に卜筮を以て天下に名を知らるゝやうになつたが、晩年に尸解仙化して了つた。

張柏端

張柏端は天竺の人である。晩年に混元の道を學び、諸國に遊歴して、名山大川

支那仙人列傳

を訪ねて居たが、宋の神宗皇帝の熙寧二年蜀の國に遊んだ時、劉海蟾に逢ふて金液還丹火候の秘訣を授けられ、それから名を成と改め、字を平叔と稱し、又紫陽と號して居た。

彼と極く懇意にして居た一人の僧侶が居て、平生戒定慧の行を修し、自分では已に禪の奧妙に達した一廉の名僧になつた積りて、潜かに自負して居たが、此者坐禪して入定する時に、常に神を數百里の間に飛ばして、自分が思ふ處は何處でも歴巡つて居た。處が或日、柏端彼と面會した時、當時揚州の一名物なる瓊花を觀んことを約束し、其處で二人は一室の中に退て相



張柏端

對坐し、各其神を飛ばして遠く揚州へ赴いた。そして栢端の神魂が漸く揚州へ到着した時には、彼僧の神魂はそれよりも前に其處に到着して居て、已に花の周圍を三遍ばかり廻覽した後であつた。

其時栢端は各一枝の花を折取て記と爲やうと言出し、二人は各一輪の花を手折て歸ることに爲た。扱て少頃して、二人は大きな欠伸と一所に眼を醒した後、各記の花を取出す段となつたが、其時僧の袖の中を檢めると、其處に花瓣の一片も残て居なかつた。然し栢端の袖の中には揚州で折取つた花が、少しも損せず、其儘其處に入つて居たので、之れを見て件の僧は犬に慚入つたさうである。

其後栢端の弟子が此事を怪んで其理由を彼に尋ねた時、彼は斯う言つた。自分分は金丹の大道を修め、又性命の理を深く味ふたによつて、自分の神は散れば則ち氣となり、聚れば忽地又形を成す、それで其神が到る處には又其形が必ず現はるゝことが出来る。之れを陽神といふ。然るに彼僧の修めた所のものは唯性の理のみで、命の理は未だ修められて居無い。それで其神が先方に通ずることが出来ても、其處に形を成して現はるといふ事は出来無い。之れを陰神といふ。陽神は前にも述ぶる通り形が明かに現はるゝことが出来る處から、物を何

處へても持運ぶことが出来るが、陰神は形を現はすことが無いから、それが出来ないものであると、精しく其道理を説いて聽かした。

英宗皇帝の治平年間、彼は龍圖陸公に隨て桂林に寓して居たが、其後秦隴に移り住み、其後又河東といふ處に行て扶風の馬默處厚を訪ね、自分が著した悟真篇をば彼に授けて、此中には自分が平生學んだ所の道の秘訣は細大漏らさず書記してあるから、此道を博く天下後世に傳へて呉れと依頼し、元豐五年の夏、一室に晏坐した儘眠るが如く仙化して了つた。時に年九十九歳である。

其處で數多の弟子は相集て彼の死骸を茶毘に附すると、舍利が幾千と無く出来て、中で大きい物は殆んど茨の實程あつて、其色皆紺碧であつたといふことだ。

其後七年經てから、劉奉眞といふ者が王屋山で不圖張栢端に出逢つた。其時栢端は一篇の詩を認めて彼に贈つた。一體此栢端といふは素と九皇真人と號して、黃勉仲、維揚の諸先生と共に皆紫微宮の星であつたが、曾て時代及び年月の運行を間違ひて記録に記し留めた罰によつて、遂に人間界に謫せられた者である。それで彼が死んだ時從來天上の紫微園内に唯六星丈けしか無かつたのが、

其後一つ増して七星となつたさうである。

王鼎

王鼎は襄陽の人で、最初は醫業を以て妻子を養ふて居たが、鍾離先生に逢ふて終に仙術を授けられた。そして其時専ら王風子といふ號を用ゐて居た。或日彼一人或河の邊に佇んで居ると、水の上に映つた彼の影が二つになつて現はれたので、傍に見て居た人々は皆驚いて其故を尋ねた。其時彼は笑を含みながらもつと數を増して見せようかと言て、其影を十個許り現して見せたので、人々は皆其奇術に驚いてあつたさうである。

宋の眞宗皇帝一日彼を宮中に呼寄せた時、彼は皇帝を見ても曾て禮拜せず、少頃經つと暇を告げて何處とも無く立去て了つた。彼に一の著書がある、それは修眞書と題して、仙道を研究する道を説いたものであるとのことである。

徐問眞

徐問眞は東萊濰州の人で、仙道には深く熟達して居たが、歐陽修とは極くの仲

善であつた。然るに一日彼突然歐陽修の許へ遣て來て、是れから遠く山へ去らうと思ふことを告げ、歐陽修が別を惜んで頻りに袖を引留めたけれども、自分に一人の親友が居て、自分が平素君等縉紳公卿の中へ交つて遊んで居ることを痛く批難して居る由を話し、其儘暇を告げて立去つた。其處で歐陽修は急に一人の童子に命じて、彼を遠く送見送らしめた。すると果して身の丈八尺餘の頭に鐵冠を戴いた一人の偉丈夫が途中に徐問眞を待受けて居たが、件の童子を見ると、瓢の中から童子の掌へ酒を少量滴らして飲ましめ、其處から直ぐに彼を家へ歸らしめた。

其後件の童子は俄に發狂して終に其行方が分らなくなつて了つた。而して彼が歐陽修の許を立去る前に、息氣を引いて足の疾を癒す法を歐陽修に教へてあつたのを、蘇軾が又それを聞て、試みに其術を行ふて見ると、果して効驗があつたとのことである。

徐熙春

徐熙春は邵武の人である。宋の熙寧初年或夜夢に一人の鐵冠を戴いた風采

の凛々しい道人に遇つたが、其翌日所用があつて會城南を通ると、其處にある五峯院といふ僧院で、一人の道人に出遇ふた。能く視ると、それは昨夜夢に見た道人と全く同じ人であつたので、彼は心の中で獨り不審がつて居た。其時件の道人は自ら刺を通して、武夷山に住んで居る蔡といふ道士であることを告げ、五華といふ草を贈て呉れたので、彼はそれを食べて見ると非常に美味しかつた。然るに其後彼は穀食を廢して、たゞ水計り飲んで居たが、龔の日某日を期して彼の道士と武夷山で再び會することを約束してあつたので、愈其日になつて武夷山に尋ねて行くと、件の道士は彼よりも先に其處に在て待て居た。

然し其處へ行くには一の大河を渡らねばならなかつた。が、水深く流が駭い爲め、如何しても向岸へ渡ることが出來ず、空しく其處から金身院といふ處へ引返して來て、其處で暫時仙道を修煉して居たが、間もなく其處で尸解昇天して了つた。

申屠有涯

申屠有涯は宋の人で、平生宜興といふ處に住んで居たが、彼は一の瓷餅を秘藏

して居た。或日舟を備うて或河を渡ることがあつたが、其時彼は例の瓷餅を取出して、其中の酒を舟中の人々へ飲ましむるに、如何した故か、其酒を飲んだ人々は俄に胸苦しくなり、皆々吐瀉を始めたので、舟中の人々は、大に怒り皆々起て彼を害しやうと爲た。

其時彼は急に件の餅を持って岸へ驅け上り、杖に身を憑せて、次のやうな詩を歌つた。

仲尼非不賢。爲世所不容。蚩々同舟子。不識人中龍。

彼はかく歌ひ了ると、忽ち身を躍らして件の餅の中へ入つて了つたので、之れを見て居た人々は、大に驚き、急に件の餅を打碎いて見たけれど、彼の姿は何處へ何う消え失せたのか、サツバツ影さへ見えなかつた。

朱有

朱有は涇州の人で、幼少の折、罪を犯して、五符といふ處へ追遣られ、其處の戍兵となつて居たが、宋の元豊初年、澶の人民反して邊境を犯した時、秦國の兵卒を差向けて之れを征せしめた。其時件の軍兵は資中郡に陣を張て居たが、其處に醜

瘦山といふ山があつて、其上に一個の仙臺がある。(此仙臺は其昔李阿が修練して居た處だと傳へて居る)朱有は軍卒に擧げられて陣中に留て居たが、或日此臺の上を彼方此方と徘徊して居ると、傍の樹の上で二羽の小鳥が互に一の餌を争ふて騒いで居た。そして不圖した機に鳥は件の餌を誤て地上へ墮したので、近俯て熟見ると、それは松の肪のやうな物であつた。

其時朱有は何心なく件の物を拾ひとつて口に入ると、腹が俄に脹れ出し、咽喉が非常に渴て來た。其處で側の池へ行て水を飲まうとすると、其處へ、忽然として一人の道士が現はれ、傍の松の樹を指して、此木の葉を食べれば直ちに癒ると告げて、其儘姿が消えて了つた。其處で朱有は教へられた通り件の松の葉を探て食べて見ると、喉の渴が直ちに止り、其上心が何となく爽かになつたやうな氣持がした。

初め彼は文字は少しも解せず、酒は一滴も飲めない方であつたが、是れより彼は自然と文字を解するやうになり、酒も亦多量に飲めるやうになつたが、其後暫時経つと、或日突然軍中から脱走して何處へか立去つた儘、再び其姿を見せなかつた。

林靈素

林靈素字を通叟といひ、宋の永嘉の人である。初め彼の母が彼を孕つた時、或夜外から歸て來て室へ入ると、紅雲が自分の身の周圍を取巻て居るやうな心持がしてあつたさうである。そして懷妊してから二十四ヶ月目の或夜、夢に緑の袍衣を着て、玉の帶をべめた、一人の神人が現はれ、手に筆を執て、明日此處を暫時借用するぞと認められたものを自分に差示すと、翌日になつて林靈素が俄かに生れた。其時室一杯に金色の光が満ち亘てあつたとのことである。

林靈素は年五歳になる迄、少しも言語を發しなかつたが、或日一人の道人が居て林靈素を見るや、其後久瀾であると言て、互に手を取合ひ、さも睦しさうに手を拍て笑ひ興じてあつたが、其れから林靈素は俄に言語を話すやうになつたのである。

彼は幼少の時から聰明であつて、一を聞て十を覺るの才智があつた。年七才の時、誰に教へられたといふこともなく、巧に詩を賦し文を作て居たが、蘇東坡一日彼と共に曆書を讀んだ時、彼は一讀して直ちに其文句を暗誦したので、流石の

蘇東坡も舌を捲て其才智を嘆賞し、子は實に後來畏るべき人であると言ふと、彼は笑ひながら、生きて封侯を得、死して宗廟に祀らるゝとも、矢張り人間の一部分たることを難れない。自分の志は人間以上の最も高い處にあると答へた。

彼年三十の時、西洛に遊んで漢天師の弟子趙昇と呼ぶ道士に逢つた。其時件の道士は、若し之れを奉じて熱心に修行するならば、神霄教主となり、兼ねて又雷霆大判官に任せられ、而して東華帝君の輔佐となるとが出来ると言て、神霄天壇王書といふものを彼に授けた。其處で其書を披て觀ると、それは神仙變化の法、雲を興し、雨を呼ぶの術及び諸の靈鬼を使役するの法を記したものであつた。

崇寧五年八月十五日の夜、徽宗皇帝は一つの不思議な夢を見た。それは彼が天帝から召されて神霄府に遊んだ時の夢であつて、雲の浮橋を渡り、天上へ行くと、やがて立派な一の天門に達した。其時一人の衣冠をつけた朝臣が手に圭を執て出て來り、恭しく帝を導いて門内に入ると、天井に朱塗の牌が掲げられてあつて、神霄玉闕之門の六字が記されて居た。次に玉樞院と扁した一の小院から一人の朱衣を着た役人が出て來て、帝を件の院内へ案内し、此處は帝君の舊と住居なされた處であることを告げた。

扱て徽宗皇帝は急、天帝の在する宮殿に到りて天帝に謁見なされた後、やがて暇を告げて其處を辭し、夔の神霄門を出て、百歩計り來給ふと、一人の道士が頭に青い頭巾を被り、身に同じ色の衣を着け、そして亦一頭の青い牛に乗り、前後左右に數多の儀衛を打隨へて、靜々と此の方を指して遣て來るのに出逢つたが、件の道士は皇帝の前に來ると、忽ち萬歳と唱へ、其の儘ズーッと天門指して行て了つた。

大觀二年徽宗皇帝は恰ねく天下に詔して有道の士を求められた時、茅山の宗師某が林靈素を推薦したので、帝は早速使を遣して彼を朝廷へ召寄せ、汝は如何なる法術を知て居るかと尋ね給ふと、林靈素申すやう、臣は上は天上の事から下は冥府のことに至る迄、悉く皆知らぬ所のものは無い。先年中秋の節、天上の仙帝へ參朝致した折、途中で不圖陛下にも會申してあつたが、陛下は今猶ほ記憶して出になるかと尋ねられたので、此處に始めて皇帝は夔の夜夢に青牛に乗つた道士は彼であつたことを知つたので、彼時乘て居た青牛は今如何してあるかと問はせられた。其時林靈素は件の牛は唯今外國へ遣して飼養させて居るが、若し望とあらば近々中に差上げ申さうと答へたので、帝も大に不思議なことに

に思召され、早速彼を帝師に任じ、天上の仙宮に倣つて神霄宮を新築して彼を其處に留めて置かれた。そして右の宮が愈々落成した時、皇帝は百官を引連れて其處に臨行し、宣徳五門來萬國マンクワンと一句を聲高らかに吟じられた。其時帝の傍に侍て居た蔡京等の儒臣共は、沈思して其聯句を考へたけれど、遂に句を爲すことが出来なかつた。然るに林靈素は之れを見て、輒ち神霄一府シヤウ、諸天シヤウテンと後の一句をつゞけたので、皇帝は斜ならず其才智を嘆賞せられた。

其後皇帝は雷書金經が少し缺けて居たのを惜まれて、彼に命じて其缺けて居る處を補足せしめた時、彼は天下に人を遣して恰ねく同書を求めたけれど、遂に之れを得ることが出来なかつた。其處で、彼は或夜神を飛して上帝に此事をば詳に上奏し、雷書五卷并に靈司の印二個を借りて來て之れを寫し取り、それをば皇帝へ奉つた。而して又政和七年高麗の國から林靈素が乘てあつた青牛を献上して寄越したので、皇帝は早速林靈素を呼出して伴の牛をば彼に下された。重和元年華山に三清殿を建る爲めに、其土を均らさしめた時、地の中から不圖一個の石匣を掘出したが、其中に雷文法書一冊が封込められてあつて、表紙は金色に塗つた絹地であつた。而して中に記してある文句は、曾て林靈素が天書を寫

して奉つた雷書と一字一句も違はなかつたさうである。其時皇帝は件の法書に一封の青詞を添へてそれを密に上帝に奉り、次の日突然林靈素に向て、朕が昨日上帝に奉つた青詞は上帝の御覽に達したらうか如何かと尋ねた。すると林靈素は暫時考へて居た後、やがて陛下は一字を記し誤つたので、仙官共はそれをば手許に差留めて置て、未だに上帝の御覽に達して居ないことを奏し、皇帝の青詞を始から終まで一字も違はず暗誦したので、皇帝は今更のやうに彼が神通に驚き玉ひ、先生の神通殆んど測知ることが出来ないと被仰て、彼に金門の羽客といふ尊號を賜つた。

或日皇帝林靈素に向ひ、先年亡くなれた皇妃のことが想出されて始終忘るゝ暇が無い、先生の法力を以つて、皇妃に逢はして呉れることが出来まいかと尋ねられた。其時林靈素は容易く承諾し、其夜祭壇を築いて天地の神を祭り、一枚の神符を飛ばして暫時祈念して居たが、やがて皇帝に向ひ、皇妃には唯今玉華宮に在して、西王母と會見し居らるゝによつて、暫時お待下さるゝならば、程なく此處に見えらるゝであらうと上奏した。斯くて須臾すると、異香俄に四方に薫じて、天花繽紛として天上より降り來り、囀曉たる仙樂空中に聞えて、皇妃はやがて青

鸞に乗て下界なされた。而して皇帝に拜謁すると、妾は素と仙官を勤めて居た紫虛元君である、暫時人間界に降つて来て、忝なくも陛下の玉體に親近して淺からぬ契をさへ結び、身に餘る恩寵を辱うしてあつたが、仙緣再び廻り来て唯今は天上に歸て亦舊の官に就て居る、陛下願はくは忠良の臣を用ひられ、永く國土を安泰に治めらるゝことに御心を留められたしと陳べ、更に皇帝は東華帝君の後身であることを奏上した。其時皇帝は皇妃に向て、今朕に仕へて居る數多の朝臣の中で、天上から降て來た者が幾人あるかと尋ねらるゝと、皇妃の云はるゝやう、明節は即ち紫虛玄靈夫人である。王皇后は獻花菩薩である。皇太子は龜山の羅漢尊者である。林靈素は神霄教主兼雷霆大判官で、徐知常は即ち東海に居た巨蟾の精である。又蔡京は即ち洞魔王大頭鬼、童貫は即ち飛天大鬼母で、兩人共世に害を爲す怖い者共故、一日も早く誅戮なされたが宜しいと。其處で皇帝は再び朕が國家の行末は如何であるかと尋ねられると、皇妃は唯黙して居て何とも答へなかつたが、暫時すると、其儘姿を掻消して天上へ歸つて了つた。

又或日皇帝は林靈素に向ひ、太祖眞武皇帝の姿を拜見したいものであると仰せられた。林靈素は委細承つて、早速符を焚て祈禱すると、今迄晴天であつた空

が俄に曇て來て、電鳴起り、凄い電光の中に數多の龜や蛇の怖しい姿が現はれ出たが、須臾すると、一本の大きな片脚が天から下りて來た。其時皇帝は心の中に聖祖願はくは全身を示して、親しく其姿の颯爽たるを示し給はれと祈念すると、眞武皇帝は忽ち全身を現せられた。見れば頭には丈尺の圓光があつて、身の丈一丈餘、金甲を戴き、寶劍を帯び、息色の袍を召して玉の帯をべめられ、髪は左右に振亂して素足の儘、スツクと庭前に立つた有様は、昔太宗皇帝の時寫取らせられた御眞影と寸分も違はなかつた。其時皇帝は親ら筆をとつて細かに其肖像を寫されたさうである。

其後皇帝は更に又或日西王母を見んことを望まれた時にも、林靈素は快く承領して、一枚の神符を焼くと、俄に西王母が數多の仙女を引具して現はれた。そして香を捻て恭しく禮拜する皇帝を見て、東華帝君其後は久瀾であると言をかけ、皇帝に神丹補益の法を授け、扱て愈歸る時に臨んで童貫等の奸臣を誅し、都をば長安に遷して太祖太宗の治に倣ふやうにと説き勸め、若し之れを疑ふならば後日必ず後悔することがあるだろうと言足した。

林靈素は平生一室の中に閉ぢ籠て居て、皇帝が行幸になつても、曾て一度も自

分の室へ案内申したことは無かつた。其處で蔡京は或日此事を皇帝に密奏して林靈素の室の中には黄羅の帳や、錦金の龍牀等を初めとして、其處に在る椅子卓等は皆各れも朱塗の珍らしい器具計りであるから、彼は態と陛下を拒んで其内へも入れ申さぬのであらうと讒誣し、皇帝に自ら彼の室に往て檢べらるゝがよいと説き勧めた。其處で、皇帝も彼の言葉を眞實と思ひ、或日神霄宮に到て、蔡京と一所に林靈素の室の中へ入つて見ると、室の中は空洞として待ち設けた物は一物も無く、唯椅子と卓とが其處に据えられて居たのみであつたので、流石の蔡京も案に相違し、平身低頭して深く己が疎忽の罪を詫びた。而して林靈素は皇帝から精しく其故を聞た時、彼は笑つて傍の壁を顧み、金殿玉樓龍牀、黄羅帳の類が各錢程の大きさに映て居るのを、皇帝と蔡京とに指示したので、之には皇帝も不思議出されて、蔡京の罪は深くも、咎めず、其日は其儘で済んで了つた。

其後皇太子は林靈素をば妖術を以て人を惑はす者であると讒誣し、而して諸の僧侶を召して彼と其法術を較べ、彼が邪法であること愈、明かになつた上は、一日も早く彼を誅戮すべきことを皇帝に説勧め、其時會、法術を巧に行ふて居た十二人の僧侶をば凝神殿に招き寄せて、林靈素と其術を闘はしむることとし、諸侯

及び群臣を招いて之れを觀せしめた。

其時林靈素は口の中に水を含み、それを空中に吐き出すと、それが忽ち五色の雲となり、其中には金龍、獅子、白鶴、鳳凰の類が現はれて、種々の舞を奏した。之れを見た件の十二人の僧侶は異口同音に、件の異禽靈獸は皆紙を剪んだ繪形に過ぎぬもので、今我々が大神咒を誦するならば、忽ち其法術が破れて了ふであらうと、大言を吐き、扱て各熱心に咒文を誦すると、件の靈禽は消失すると思ひの外、却て前林よりも益、多く現はれて來た。

次に件の十二人の僧侶は水を呪じて沸騰せしむるの術を行つたが、扱て愈、其術に



取懸らうとする時、林靈素は密と水を盛つた釜に近づき、一口の氣を其中へ吹込
ひと、件の水は皆悉く氷て了つた。

次に林靈素は薪を堆高く積んで其間に一の通路を作り、それに火を點すると
焔烟天を焦して件の薪は盛に燃え上つた。其時彼は自ら先に立て件の薪の中
へ入つたが、彼のみは少しも火傷することが無かつたけれど、彼の十二人の僧侶
共は各れも皆大火傷を爲て、其火に近づくことさへ出来なかつた。其處で道の
頑強な僧侶共も今は全く法術が盡て了ひ、唯大地に平伏して一向其罪を詫び、皇
帝を初めとして、其處に並居た諸侯群臣は各れも林靈素の神通廣大なるを贊嘆
してあつたさうである。

扱て林靈素は其後朝政の日に、衰へ行くのを見るにつけても、深く蔡京童
貫等の姦惡を憎み、常に彼等を誅戮して國政を革新せられんことを皇帝に説き
勧めたけれど、何時も採用せられなかつたので、今は朝廷を遁れて山に隱るゝに
如かずと決心し、諸の弟子を集めて、是迄に皇帝から下された品々を、一物も残ら
ず封じて室の中へ藏め、私に弟子共を引連れて京師を遁れ去つた。然し皇帝は
彼が勳功の多いことを賞せられて、特に温州に一の道觀を賜へ、長く其處に彼を

留めて置かれた。

或日林靈素は弟子の張如晦と云ふ者を近く呼びよせ、自分は今度愈、仙化して
了ふけれど、他日再び神霄宮に於て彼に廻り會ふことを告げ、其儘遂に卒して了
つた。是より先き、彼は豫め郭外に或清淨な場所を撰び、其處に自分の墳墓を築
き、そして若し自分が死んだら、普通の墓穴よりも更に五尺丈け餘計に堀り、龜や
蛇等が棲んで居る處迄到つた時に直ちに地を掘ることを止めて棺を下して吳
れ、そして五色の氣が立ち上るのを見たら、土を蓋はずに棺を其儘に放棄して置き、
急に後方へ百歩計り引退て吳れよと、遺言した。其處で、彼が死んだ時、弟子共は
遺言通り彼の棺を穴の中へ下し終ると、急に百歩計り後へ引退いた。此時早く
彼時遅く、爆然一發の恐ろしい響と共に、砂塵四方に飛散て、一時は雲霧のやうな
ものが四邊を立籠めて何物も見えなかつたが、扱て雲霧が散して見ると、彼が棺
は已に何處へ飛び去て居た。

其後徽宗皇帝は金の兵に攻められて位を去り、皇太子が愈、天子の位に即かれ
た時、人を遣して林靈素の塚を打碎かしめやうと爲たが、彼の塚の附邊には大石
が散亂して居て、一步も側へ寄りつけぬのみか、雨風烈しく降り、濺き、電光物凄く

して誰一人塚に近傍る者も無く、三日計りの間空しく其附邊に逍遙ふて居たのみで、遂に其目的を達することが出来なかつた。是に於て皇帝も漸う始めて自分が悪かつたことを後悔し、急に彼を封して通眞達靈真人となし、天慶觀に祠を建て懇ろに彼を祀てあつた。其祠は今もなほ現存して居るといふことである。

此處に南宋の宰相に趙鼎といふ者か居て、未だ幼少の時分或日林靈素彼を觀て、汝は後日必ず宰相となるであらう、然し不圖すれば春頭木會の賊に逢ふことがあるから、其時は潔く官を辭して退隱するがよい、若し強て踏み留て居れば大なる禍に逢ふべし、其時は余再び汝と潮陽の驛で再會するであらうと言てあつた。其の後果して彼は高宗皇帝の時宰相となり、時めく勢は旭日の登るやうであつたが、偶然した事から秦檜と云ふ者の讒誣に逢ふて、海中の孤島へ謫流せらるゝことになつた。其時彼は道すがら潮陽といふ處を通り、其處に一夜宿泊することになつたが、其處に繡衣を着て朱鞋を穿た一人の少年が居て、趙鼎を見ることになりながら、先年自分が言つたことを今始めて思ひ當つたかと言つたので、趙鼎は驚いて件の少年を熟視ると、それは即ち林靈素であつた。其後趙鼎は此事を逢ふ人毎に物語て、自分は其時始めて林靈素が眞の神仙であることを悟つたと

と言て居たさうである。

李鼻涕

李鼻涕は宋の紹聖初年頃の人で、其實名は明かでない。鼻涕に垢膩を混じて丸めて丸薬となし、之れを人々に頒ち與へて居たが、之を服すると、如何なる病氣でも不思議に癒て居たので、世の人々は皆彼を指して李鼻涕と稱し、其名諸方に聞えて居た。

此處に劉延仲といふものか居て、秀州といふ處に寄寓して居たが、或日李鼻涕が門前を通るのを見て、彼を家の中へ招き入れ、種々物語を爲した末、彼は李鼻涕に向て生憎酒が無いのでと詫を言ふと、李鼻涕は打笑て、酒が無くとも其處の床の上にある水瓶で結構だと言ひ、而して劉延仲が童子を呼んで件の瓶に水を汲んで持來さしめやうとするのを、それを又制止止めて、其瓶さへあれば充分だ、水を盛るに及ばぬと言て、件の水瓶を床の上から取卸し、一枚の白紙を以て其口を掩ひ、暫時經てから件の紙を取去ると、何時の間にか其中に酒が一杯はいつて居た。而して二人は右の酒を飽くまで飲みつ差しつして、十分の歡を盡して別れ

てあつた。

莎衣道人

四二〇

處が或日李鼻涕は突然劉延仲の許へ來て、懇に暇を告げた後、是れから二十年経つた後の某月某日、眞州で再び逢ふことを約束して其儘何處へか立去て了つたが、扱て愈、約束した其日になると、恰かも用事を帯びて眞州に行て居た劉延仲は、病氣でもないのに俄に死んで了つた。

莎衣道人

莎衣道人は淮陽軍の胸山の人で、姓は何といひ、彼の祖父の執禮といふ者は宋朝に仕へて朝儀大夫となつて居た。道人は幼少の時兵亂を避けて江南に移つたが、紹興末年平江といふ處に住んで居た。

彼は平生身に一枚の白い襦衣を着て居て、それが破るれば、かたつ莎を以て繕ふて居たので、世の人々は誰云ふとなく、皆彼を呼んで單に莎衣道人々々々と言て居た。

或日彼は池の畔に立て、水面に映る自分の姿を熟々眺めて居た。其時、フト心に大に悟る處があつて、其後逢ふ人毎に未來の吉凶禍福を説いて居たが、それが

奇妙に又一々の中してあつた。又名も知れぬ一本の草を採て來て、それを煎して病人に服せしむるに、如何なる病氣でも立處に平癒しないものは無かつた。

孝宗皇帝一日彼が名を聞て、兩三度使を以て彼を朝延へ呼び招いたけれど、彼は一度も召に應じなかつた。其處で皇帝は彼に通神先生の號を賜へ、更に衣類數襲を贈つたけれど、彼は堅く辭して受け取らなかつた。而して其後何處へか立去て了つた。

王文卿

王文卿は撫州臨川の人である。雷を呼び、雨を降らし、其他有らゆる鬼神を使役するの術に長して居た。宋の政和初年皇帝から召されて朝延へ出仕することになつた。其時明堂に於て朝儀を行はんと爲た際であつたが、折りしも連日の雨が降り止まず、之れが爲めに儀式も擧げ兼ねて居た時であつたので、皇帝は早速彼に命じて晴天を祈らしめると、雨が俄に止んで、雲が見る／＼四方に散り、天氣殊の外清明になつた。其處で儀式は先づ滯りなく濟ますことが出來てあつたが、扱て式が愈、終ると、空が忽ち曇て來て、雨が復た舊の如く降て來た。是に

王文卿

四二一

於て皇帝は大に彼の勳功を賞し玉ひて、冲虚通妙先生の號を賜はり、凝神殿に住はせて置いた。

或年揚州が大に旱して五穀實らず、民百姓特の外難儀爲て居る由上奏する者があつたので、皇帝は王文卿に命じて雨を禱らしめると、彼は劍を抜いて其刃に一口の水を吹掛け、黄河の水三尺丈け借り度い旨を上帝に祈請すると、其志が上帝に通したものと見え、數日經つと、揚州地方に冷ねく雨が降り濺いて、人民共は始めて蘇生の思をしてあつたさうである。

其後王文卿は朝廷を辭して紹興へ歸て來た。而して或日弟子共に向て西北の空に黒雲が起つたらば、速かに自分の許へ知らして呉れと言合めて置いたが、其後暫時經つと、忽地西北の空に一簇の黒雲が湧き出たので、弟子共は斯くと王文卿に告知らすと、彼は獨り點頭しながら室の中へ入り、其儘尸解仙化して了つた。其後乾道初年或人が、成都の市中で再び彼に出逢ふたといふことである。

陶道人

陶道人は黎州の人である。宋の政和年間薪を採る爲めに獅子山へ上つた時、

不圖一人の異人に逢ふて仙術を學んだと言傳へられて居る。

其時此處に王畫龍といふ者が居て、平生龍を畫くことに妙を得て居たが、唯不思議なことには、彼が龍は必らず何處かに一筆欠けて居る處があつて、彼は之れを知て居りながら態とそれを補ふことを避けて居た。而して若し強いてそれを補はしめると、一天俄に掻曇りて雷雨劇しく降來り、件の畫龍は忽地紙を抜け出て天上へ飛去るのであつた。

而して陶道人は彼を見る度に杖を以て彼の脊を撃ち、此の龍妖めがくと言て罵て居たが、其後兩人共何處へか立去て終に其行方が知れなくなつた。

武元照

武元照は紹興蕭山の婦人である。未だ嬰兒の時分、彼女の母が葦アシき物を食べれば、彼女は終日母の乳を離れて飲むことを嫌ひ、菜食すれば復た乳を呑む。其處で母は最初から此事を不審に思ふて居たが、稍成長して年頃になつたけれど、彼女は何故か結婚を嫌ひ、其様な話が持上る度に極めて不機嫌であつた。處が或夜夢に一人の神人が現はれて、彼女に汝は本と天上の仙女である、犯した罪に

よつて終に人間界に謫せられたのであるが、今より後は五穀を断て一日も早やく仙化することに心掛けよと告げた。其處で彼女は其後全く五穀を避けて食はなかつたので、母之れを見て大に心を痛め、種々の手段を設けた末、或日漸く彼女に飯を食はしめると、其夜爰の神人が再び彼女の夢に現はれて、戒に背いて五穀を食べたことを甚く責めた上、彼女の腹を剖て胃の中を洗滌した後、更に靈寶の法を授けて、人の病を治すことを教へた。

是れより武元照は符水を以て能く人々の病を治し、村の人々から神のやうに尊敬せられて居たが、或日同時刻に數千軒の人家に到り、其家の人々を招き寄せたので、彼の人々は何事が起つたのか知らんと急いで武元照の家へ駆けつけて見ると、其時は己に彼女が死んで居て、爰に彼等の家へ一々呼びに行つた時は、即ち彼女が丁度息を引取る時刻であつたとのとである。

孫賣魚

孫賣魚は本名は何といひ、何處の人であるか詳でない。楚州といふ市へ出て魚を賣て居たが、或年の夏一人の異人が彼の許へ尋ねて來て、汝の魚は皆死んで

居ると告げ、若し自分に酒を馳走するならば、其魚を悉く活して遣らうと云つたので、彼は早速酒を出して、件の異人に馳走して遣ると、件の異人はさも面白さうに四方山の話をして、何處へか立去て了つた。

扱て池の中に飼ふて居た魚は、最初悉く皆死んで水面に浮んで居たが、異人が去つた後で見ると、件の魚は皆悉く蘇生して居た。此事があつた以來、孫賣魚は稍、發狂した氣味で、能く人を執へては、其人の身の上を判断して居たが、それが不思議にも悉く的中して居た。

宋の宣和年間、彼は京師に召されて、塵隱處士の號を下されてあつたが、靖寧の初年、亳州の太清宮に詣り、俄に大聲を揚げて泣き號び、身を躍らして慟哭した。傍て之れを見て居た人々は何の故で彼は泣き悲しむのか、誰一人其理由を解するものはなかつたが、其後其時日を按んじて見ると、それは即ち汴京が金の兵の爲めに攻め亡ぼされた日であつたさうである。

薩守堅

薩守堅は蜀の國西河の人で、幼少の時醫術を習てあつたが、或時藥を間違て調

劑して人を殺してからは、大に罪を悔いて、斷然醫業を廢し、其後江南の信州に住んで居る三十代の天師虚靜先生といふ者に從て道を尋ねやうと思ひ、漸く陝といふ處迄來た時、旅銀に盡きられて大に困て居た。其時不圖三人の道士に逢ひ、彼等からして虚靜先生の已に仙化したことを聞て大に力を落し、熟己が身の薄運なのを歎いて居ると、件の道士の一人が之れを見て氣の毒に思ひ、唯今の天師も先代に劣らぬ真人であることを示げ、幸ひ自分は彼と少し相識の間であるからと言て、一通の紹介狀を認めて呉れ、尙ほ彼に咒棗の術を授けた。それは一個の棗を咒すれば錢七文を得べく、一日の中に十個の棗を咒すれば七十文の錢を得らるゝ譯であつた。

其時今一人の道士は彼に一個の機扇しゅうせんを授け、此扇を以て扇けば、如何な病でも立處に癒るとの事であつた。然すると亦第三の道士も他の二人の道士に倣ふて彼に雷を起す法を授けた。其處で薩守堅は途中恙なく江南の信州へ到て天師に謁え、遂に其法術を授けらるゝことを得た。後で聞けば、件の三道士は虚靜先生、林侍宸、王侍宸の三人で、彼に紹介狀を書て呉れた者こそ、彼が日頃尋ねて居た虚靜先生であつたさうである。

其後薩守堅は天師の許を辭して四方に遊び、湘陰と云ふ處に到つた時、或城隍の傍の圖ある廟の中に數日滯留して居たとがある。其時件の廟の神が或夜太守の枕神に立て、先日から薩先生が自分の許に留て居て、何分氣詰て困るから、一日も早く彼を他の場所へ退出して呉れと哀願したので、太守は其翌日早速件の廟へ行て、其處から薩守堅を退出した。其處で彼は心の中で深く廟神の無情を怨みながら、其處を立去て數十里計り行くと、途で數多の人々が一頭の豕を昇いて來るのに出逢つた。何心なく彼の人々に其理由ゆゑを尋ねて見ると、それは彼の湘陰の廟へ納める爲めの物であつたので、彼は少許の香を包んで彼の者共へ渡し、此豕を神へ納めた其後で、此香を爐の中に薫らして呉れと頼むと、彼の者共は快よく承諾し、廟に着いた時、件の香を爐火の中へ投げ入ると、俄に大雷鳴の如き響起つて、火花が四方に散り、忽ち件の廟を焼き拂つて了つた。

其後三年許り經て、薩守堅が或渡場を渡らうと爲たが、其時生憎船頭が不在であつた爲め、自ら棹をとつて舟を繰つた。而して舟の借賃にもと思つて錢三文を舟の中へ置き、手を伸して河の水で洗ふて居ると、彼方の河の中に、頭に鐵冠を戴き身に紅の袍を着た一人の神人が、手に神斧をとつてスツクと立現はれたの

て彼は聲を荒らげて、何者なれば斯様な異形の姿を以て今此處へ現はれたのであるか、早く其本身を現はさばよし、然もなければ直ちに辛き目に遇して遣るぞと叱ると、件の神人いふやう、自分は湘陰の城隍の神である、何時ぞや君に廟を焼かれた爲め、其事を上帝へ訴へると、上帝も不憫に思召し、自分に此神斧を賜へ、そして日夜君の側に監視して居て、君に何か落度のあつた時、此斧で仇を仕返すやうにとの内意であつたので、それから爾後、二年の間絶えず君に隨て其機會を窺ふて居たけれど、今日迄君に聊かの落度が無かつた爲め、遂に其機會を得ることが出来なかつた。然して君が唯今舟を盗んで河を渡らうとなされたけれど、舟の中に錢三文を置かれたので、君の罪は全く消えて了ひ、君の爲めには幸運よく、自分の爲めには殘惜しいことながら、遂に君を撃つべき時機を失ふて了つたのである。扱て今日迄、君の操行を観るに實に光明正大にして聊も暗い處がない、斯の如き真君を撃うとしたのは全く自分の不覺であつた。今日より心を離して君が配下の一部將となり度いから、何卒永く御目を掛けられて欲しいと、誠心顔に現はれて居たので、薩守堅も甚く彼の志を賞し、早速其請を容れて彼を自分の部將の一人に取立てた。

其後彼が閩中に遊んだ時、或日諸の部將姿を現はして彼に謁え、上帝の命を奉じて彼を此處まで迎に來たことを告げた。其處で、彼は彼等と共に昇天して、上帝から天樞領位真人の位に叙せられた。

孔元方

孔元方(一番には取に)は、許昌の人である。仙道を得て平生松脂や茯苓などを服して居たが、年老るに従て容顏益々若くなり、年が百歳以上になつたけれど、顔を見ればまだ四十位の人にしか見えなかつた。邾元節



左元方などは皆彼の親友で時々會しては互に酒を飲んで樂んで居たが孔元方の酒量は漸う一升位に過ぎなかつた。

或日彼は以上の人々と會して酒を飲むとがあつた。其時彼は杖を地上に立て、一方の手を以て其杖の端を握り、身を翻して宙に逆立をなし、更に一方の手に杯をとつて酒を飲んであつたので、座中の人々は皆驚いて了つた。

彼は性來極めて寡欲な性質で、妻や子供もあつたけれど、それが爲めに金品を貯蓄するなどの念は露程も無かつた。曾て彼が誤て火を失して一家圓燒になつた時なども、彼は垣の下に箕踞つて居て、盛んに燃える焔を面白さうに打眺めて居て、妻や子供が頻りに品物を取らさうと働いて居るのを見たけれど、別に手助けを爲やうとも爲なかつた。

彼は或河水の邊りに一の土窟を掘て其處に棲み、一月も二月も斷食して居たが、三月目位に再び又自分の家へ歸て來る。然るに其土窟の前には一株の栢の木が繁て居て其入口を掩ひ隠して居たのみならず、雜草が茫々と生えて居たので、世間の人々は斷えて彼の土窟の在る事を知て居らなかつた。若し之れを知て居たとしても、凡骨の者は其處の前に到ると忽ち道に迷ふて、如何しても其土

窟を見出す事が出来なかつた。それで彼の弟子の者共でも何か急用があつて彼の許へ尋ねて行く時があるけれど、毎時も其土窟を見出す事が出来ずに、空しく歸て來て居たといふ事である。

然るに此處に憑遇といふ一人の少年が居て、性來非常に仙道を好み、如何かして孔元方の在家を探して道を求めやうと思ひ、或日件の河畔に行て彼の土窟を探し出し、遂に孔元方に面會する事を得た。其時孔元方は彼に向て、是迄能く人々が我を尋ねて此處へ來るけれど、毎時も此處を探し得ないで皆歸て了ふ。處が汝は不思議にも此處を見出す事を得たのは、定めて仙縁があるによつてのとであらうと言て、素書二卷を取出して彼に授け、此書には道の秘訣が記されてあるから、よく心をつけて讀むがよいと告げ、なほ言葉を續けて、此後四十年經た後なれば人に此道を授けてもよい、然し年限が來たといつて妄りに授けてはならぬ。そして若し四十年經ても之を授くべき相當の人間に遇はなかつたら、八十年目に必ず二人の者に一所に出喰す事があらう。一體授くべき仙縁のあるものに遇ふても惜んで授けないものは、之れを天道を閉づるといひ、又授くべき人間でないものに妄に授くるのを天道を泄すといつて、皆其罪は子々孫孫を

でも及ぶであらうから、能く能く此處の事を辨へて決して誤るやうな事を爲るなと説いて聞かせ、なほ自分は今汝に此道を授くる事を得たから、これで自分の役目は済んだ、自分は今から仙界に去らうと思ふて居る由を告げ、更に妻子の者にも丁寧に別を告げて西岳に上つて了つた。然るに其後五十年計り經つと再び故郷へ歸て來たが、其時なほ故郷の人々の中に、彼を記憶して居るものも少なくなかつたさうである。

王 嘉

王嘉は重陽子と號し、咸陽の人である。母は不思議な靈夢に感じて彼を孕んだ。彼は母の胎内に在ること前後二十四ヶ月餘て漸く生れた。

齊の劉豫の改元阜昌の初年天下が饑饉で人民が大に難饑した時、彼は家財を散して冷ねく人民を救つた。此處に或一群の悪い人民が居て、或日大舉して彼の家へ闖入し、手當り次第に家財を強奪して去つた。其後官の有司が件の悪者共を悉く召捕へて之を刑に處しようとなつた時、彼は彼等の窮狀を憐み、特に其罪を宥して彼等を放免せんことを請ふたので、人々は皆彼の徳に悦服して了つた。

其後彼は呂純陽に逢ふて、修仙口訣と秘語五篇とを授けられた。其處で彼は妻子を初め諸の親戚に別を告げ、家を去りて諸方を遊歴して居たが、彼は性質極めて放縱にして物事に齷齪するのを大に嫌つて居たので、時の人々は皆彼を呼んで王害風と稱して居た。

彼平生一個の鐵鑪を持って居て常にそれを携へて家毎に食を乞ひながら、藍田、登州、崑崙の間を其處此處と流浪して居たが、其弟子の重なる人々は馬銚、譚玉、劉處玄、丘處機等である。而して年五十八の時、弟子及び知人等に一々別を告げて眠るやうに卒して了つた。弟子の馬銚彼の後を嗣ぎ、譚劉、丘の三人は互に宗盟を結んで彼の道を廣く傳播することに努めた。

元の至元六年彼は重陽全真開元真君の尊號を贈られた。彼の著書に韜光集といふのがある。

馬 銚

馬銚は寧海の人である。初め名は從義といひ、字を宜甫と云て居たが、其後名を銚と改め、丹陽子と號して居た。彼が生れたのは金の太宗の天會五年で、彼の

母が彼を妊む時、仙人麻姑から仙丹一粒を受け、それを口に入れて呑み下すと夢みたさうである。彼は幼少の時から才智非常に秀でて居たが、李無夢といふ者或日彼を見て大に驚き、此子の額に三の山の形があつて、手を垂れば膝の下まで届く、成人の後には天晴れな大仙聖となるであらうと、大に彼を賞揚してあつたが、其後彼は自分の娘の孫仙姑を以て馬銚に妻めました。

扱て馬銚は孫氏を妻として三人の子供を儲けたが、或時彼は戯に次のやうな詩一篇を作つた。

抱元守一是工夫。懶漢如今一也無。終日啣杯暢神思。醉中却有那人扶。

之れを觀た者の中で、誰一人として其深意を知る者は無かつたが、或日王重陽祖師王真が終南山から彼の許を訪ねて來て、君と自分は前世から仙縁があると、言て、暫時彼の許に滞在して居た。處が或日馬銚と一所に瓜を食べることがあつたが、祖師は件の瓜を帶おの方から食ひ初めたので、馬銚は大に驚いて其故を尋ねると、祖師は、只一言、苦い中に甘い處があると答へた。初め祖師が馬銚の許へ來た時、堅く其姓名と住所とを秘して告げ知らさなかつたが、此時馬銚は彼に君は一體何所から來られたのであるかと尋ねると、彼は始めて微笑みながら、千里

の道も遠いと思はず、態、醉ふた人を扶ける爲めに此所へ遣て來たのであると答へた。其所で馬銚は暫時默然として其意味を考へて見ると、何うやら自分が癡に作つた詩と暗合して居るやうに見えるので、獨り心の中に深く之れを怪んで居たが、後其道に深い人であると悟り、直ちに彼に従て仙道を學ぶとになつた。

是より先、馬銚曾て或夜一羽の鶴が地中から湧き出る所の夢を見たので、南園に一の菴を築いて全真菴と號し、祖師が見えた時彼を其處に留めて置いたが、其後祖師は馬銚をも伴ひて西方の國々へ遊びに出掛けやうと思ひ、度、馬銚を誘ふて見たれど、彼は家業を棄るのを惜んで彼に従て行くことを欲しなかつた。然し祖師は切りに仙道三昧に入らんことを彼に説き勵めたので、彼も終に意を決して、一切の家財を三人の子供に頒ち與へ、其身は祖師に従て崑崙山の煙霞洞に住んで居た。

彼が妻の孫仙姑も亦彼に倣つて家の傍に一の菴室を築き、平生其處にあつて道を修煉して居ること前後二十餘年であつた。處が、或日馬銚は弟子に向て、今日自分にとつて非常に喜ばしい事があると、言て、朝から音楽よ踊よと騒いで居たが、暫時して空中に、天樂の響が聞え、孫仙姑が數多の仙童玉女を附隨へ、旌や

ら、羽旄やら、儀仗やらを、殿しく指撥して空の上を通り掛り、様、雲の上から馬銚に言葉をかけ、自分は一足先に蓬萊へ詣て君の來るのを待て居る由を告げ、其儘何處へか立ち去て了つた。すると其夜になつて雨風烈しく吹き、雷鳴頻りに轟いてあつたが、馬銚は東枕に横に臥した儘俄に絶息して了つた。然るに彼はそれと同時に酒監の郭復中と劉錫の許に現はれ、筆を借りて次のやうな頌詞一篇を壁に題して、何處ともなく立去つたといふことである。

長年六十一。在世無人識。烈雷吼一聲。浩々墮風逸。

孫仙姑

孫仙姑は名を不二といひ、又清淨散人とも稱し、馬銚の妻で、夫と齊しく寧海の人である。初め母が彼女を孕む時に、一羽の鶴が懷の中に入る夢を見てあつたさうである。彼女は幼少の時から才智淑徳兩つなから優れて居たが、重陽祖師が終南山から來て馬銚の許に逗留して居た時、彼女は夫と共に彼に従て道を學ばれた。

初め或夜のこと、祖師は酒に酔ふて餘所から歸て來ると、直ぐに仙姑の寢室へ

入つたので、仙姑は大に腹を立て、室の戸を堅く鎖し、急き童僕を夫の許に遣りて此事を訴へた。其時馬銚は訝しさうな顔をして、祖師は今が今まで、自分と一所に此處で道の話をして居られたので、然様な筈は無い、恐らくは何かの間違てあらうと言て、直ちに妻の寢室へ行て見ると、其處には祖師の姿が見えない、次に彼の居間を覗いて見ると、彼は其處に寝て居て正に熟睡中であつた。此事があつてから仙姑は一層祖師を尊ぶやうになり、夫と一所に熱心に道を修めることになつたのである。其時彼女は年正に五十歳であつた。

其後彼女は復た鳳仙姑に従て道を學び、洛陽に六年計り留て居たが、或日沐浴して身體を淨め、新しい衣に着換へて、

三千功滿超三界。跳出陰陽包裹外。隱顯縱橫得自由。醉魂不復歸寧海。

といふ一首の頌を作り、之れを認め終ると、其儘端坐して息が絶えて了つた。其時異香四方に薫じ、彩雲四邊を籠め、瑞氣氤氳として終日散じなかつたさうである。彼女が仙化して了つた同日の夜、彼女の夫馬銚も亦仙化して了つた。

譚處端

譚處端は寧海の人である。字は通正といひ、名を玉と稱し、長眞子と號して居たが、後名をば處端と改めた。幼少の時から起居動作普通の人と異つて居たが、年六歳の時誤て井戸の中へ墜落したので人々は驚いて彼を救ひ上げやうとする、彼は水の上に安坐して居て、何處も負傷は爲て居らなかつた。

又或年彼の家が失火して棟が彼の寝て居る枕許へ焼け落ちた時、彼は靜に起上り、少しも驚き慌てた様子もなく、悠々と焔の中を潜つて戶外へ出て來たので、之れを見た人々は皆驚いてあつたさうである。

彼は博學多識にして百家の書を涉獵して居たが、特に書を能くし、最も草隸に巧であつた。彼が十歳の時の詩だと言て今日迄傳へられて居る、木架の葡萄を詠じた詩の一節に、一朝行上青龍架。見者人々仰面看。の二句がある。

或日彼酒に酔ふて雪中に臥し、爲めに風痺の疾を發した時、彼は直ちに北斗經を誦して疾を癒さんことを禱ると、其夜彼は一の奇妙な夢を見た。それは大いしじな風が風に翻つて空中に浮んで居たので、彼はそれを取らうとして傍に近寄て見

ると、其蓆の上に諸の星神が威儀を正して列坐して居た。之れを見て彼は大に驚き、急に平伏して禮拜すると、夢が忽ち覺めて了つた。然るに夢が醒めた後も精神恍惚として心地何んとなく爽かであつた。而して此事があつた以來、彼は俄に仙道を求むるの志を起し、金の世宗皇帝の泰定七年、馬銜の家に滞在して居た王重陽祖師の許へ詣て弟子となり、其儘其處に留て道を修行して居た。

其後重陽に隨て崑崙山に赴いた時、一日新郷府君の廟に宿泊し、尋て復た衛州へ赴いた。其時新郷の廟官に温六といふ者が居て、夜半に堂内の燈火が明々と點つて居るので、不審に思ひ、竊に床から這出て窺ふと、何時の間にか、昨日衛州へ出發した等の處端が獨り燈火の下に端然と坐して居るのであつた。之れを見て彼は大に驚き、早速其前に驅け寄て三拜すると、處端は默て一言も發せず、暫時してフイと室を出て行つたが、何時迄待てど再び歸て來ない。其處で温六不審に思ひ、堂内の隅々限なく探したけれど、處端の姿が見當らなかつた。其處で温六は再び驚き、急に道衆共を呼び起して委細残らず物語り、朱四といふ者を衛州へ遣して處端が此處へ見えなかつたと尋ねると、宿の主人は不審に思ひ、處端は昨日此處へ見えてから少時も外出爲ないことを答へたので、温六を初め廟

内の道衆共は此處に始めて、處端が神遊の術を行つたのであつたことを知つたさうである。

其後處端は磁州といふ處へ行て乞丐を爲て居ると、其處に一人の狂者が居て、拳を堅めて突然彼の唇の邊を撃ち、齒二三枚缺け折れて血が夥しく流れ出た。けれど、彼は少しも怒つた氣色もなく、唯君の教誨を謹んで感謝すると云ふて靜に其處を立ち去つた。其時關中に居つた王重陽は之れを聞て大に喜び、一個の拳で平生の惡業を悉皆消滅して了つたと言て、大に彼の雅量を賞讃したさうである。

此處に高唐縣の茶賣商人に吳六と云ふ者が居たが、或年處端其處を通つた時龜蛇の二字を書いて彼に與へたことがある。其時彼の主人は右の書を肆の上に懸けて置くと、或時隣家から失火して數多の類焼があつたけれど、如何なる故か吳六の家のみは獨り無難に此火災から免れた。其れから人々は件の處端の書を以て、呂純陽の辟火符と同様に火災を免るゝ神符であると言て、大に之れを尊重して居た。

其後處端は東國の方に遊んで陽武といふ處へ到つた時、或夜北斗星が互に其

位置を換へて、星が車の輪の形を爲して回轉するのを見た。其時彼は傍に居た弟子の石孔目に向て、今年此地に大洪水があるだらうと、眉を蹙めて話してあつたが、果して其後間もなく河水が溢れて多くの田畑を害した。或年の某夜夢に重陽丹陽の二人が現はれて、處端に仙化の期日が迫つたことを告知したので、彼は其翌日一篇の辭世の詩を作り、靜に身を床の上に横たへた儘終に絶息して了つた。彼の著述に水雲集前後二卷あるが共に世に行はれて居る。

劉處玄

劉處玄字は通妙、長生子と號す。母彼を妊む時、夢に一人の白衣を着た翁が居て、傍の樹を指し、彼女に其葉を摘み取らせた。其樹といふのは實に玉を以て鑲めたかと思ふやうに奇麗な神木で、其葉は皆悉く金色の光を放て居た。其處で彼女は翁に教へられた通り、其木の傍に近寄て一枚の葉を摘み取て見ると、それは即ち一羽の金色した蟬で、忽ち飛んで彼女の口の中へ入ると見て忽ち目が醒めた。そして處玄が生れた時には、二つの紫氣が大空を横切て、一方は大基山に連り、一方は彼の家へ達してあつたさうである。

或年處玄が居間の壁に誰が認めたといふことも無く、二句の頌が題されて居たが、其墨痕は未だ充分乾き切て居なかつた。其頌に曰く、
武官養性真仙地。須作長生不死人。

是年重陽は弟子の丹陽長真子と共に東の方から遣て來て、彼の村を通つた時、彼は母と一所に重陽に拜謁して弟子となつた。其時重陽は彼に向て、汝は居間の壁に掲げてある二句の頌を解することが出來たか、奈何かと問尋ねたさうである。

此處に駙馬都尉某といふ者が居て、萊州といふ處の知事となつて居たが、處玄に歸向する信徒が日に／＼多くなるのを見て、彼を以て妖術を以て人を惑すものと思ひ、或日彼を捕へて獄中に禁錮した。然るに其後白晝處玄の姿を市中に見受けたといふ者が多くあつた而已ならず、獄吏の鄭姓と云ふ者も亦現に彼の姿を見付けたので、急いで歸て來て獄中を檢べて見ると、處玄は室の中に熟睡して居た。其處で再び驚いて、早速此由を具に駙馬に上告した。是に於て駙馬も始めて彼の凡人でないことを知り、其れから直様彼の縛を解いた上、厚く其罪を謝して彼を放免した。

唐廣眞

金の泰和二年時の皇帝濱州といふ處に祭壇を築き、處端を招いて天地の神を祭ることがあつたが、其時は正に正月の中旬で、小雪初めて霽れ、日も麗に風も餘り寒からぬ日であつた。其時城の濠の水の上に花を着けた木が數千本一時に現はれ、瓊葩雪に映し日光に耀く態實に此上もない奇觀であつた。そして伴の木の中で、桃杏の花が一番多かつたといふことである。之れを見た人々は、是れは大方神が處玄の神徳に感じて現はされた奇瑞であらうと言て、誰一人處玄の神徳を讃めぬ者とは無かつた。そして其翌月處玄は俄に仙化して了つたが、時に年丁度五十有六。彼の著述に太虛安閑仙集、至真語錄等あるが、各れも皆廣く世に行はれて居る。

唐廣眞は巖州の女で、嫁入してから間も無く精神病に罹り、種々治療を施したけれど、少しも効能が見えなかつた。然るに或夜夢に一人の道人が現はれて、彼女に一袋の薬を與へてそれを服さしむると、不思議にもそれより病氣は頓に快くなつた。其處で彼女は夫と別れて或道士に従ひ、専ら仙道を修行して居る中、

何仙姑に遇ふて道の要訣を授けられた。

宋の惇熙年間、彼女は郭氏の家に寄寓して居たが、一日食卓に向て食事をして居ると、門外で誰か頻りに自分を喚ぶ者があるので、戸外へ出て見ると、其處に三人の仙人が居て、或海濱に彼女を誘ひ出し、それから名々蝦蟇に乗て海を渡り、諸々方々の名山を連れて廻て居る中、或日伴の仙人共は彼女に向て、汝は仙人となつて天上に生活することを欲するか、それとも又地仙となつて長く此世に留り居らんことを欲するか、孰れを撰び取るかと問ふたので、彼女は暫時眞案じた後、自分の母親が未だ生きて居るところであるから、一生長



壽をして母に充分孝行を盡して遣りたいと答へた。其處で彼等は唐廣眞の言葉に従て地仙となる仙丹一粒を與へた。而して彼女は右の薬を飲んでからは一切米食をなさず、唯氣を吸ふて長壽を保て居たが、其後天帝から召されて昇天し、徳壽宮に入つて寂淨凝神眞人に封ぜられた。

朱 橘

朱橘は淮南の人で翠陽と號して居た。初め彼の母が彼を妊む時、大さ斗程の一の星が天上から飛んで来て自分の口の中に入ると夢見た。然るに彼は母の胎内に在ること已に十五ヶ月になれど、未だ産るゝ様子が見えなかつたので、母は此事を非常に心配して居ると、或日門前に一人の道士が遣て来て、一個の橘の實を與へ、是を食べれば腹の子が直に生るゝてあらうと言たので、母は大に喜んで件の橘を食べたり、次に件の道人の姓名を尋ねると、鞠君子とは自分のことであると言つて、其盛姿が掻消して了つた。鞠君子とは號を九霞と言て陳の翠廬が弟子である。

其後姑く經つと果して朱橘が生れたので、母は彼の名を橘と呼び、大切に育て上げた。彼は成長すると、一向仙道を慕ふて世の名利を厭へ、風清き夕暮など獨り池水の畔に行んで人生の歡樂の敢果なきを悲しみ、葆光抱一の道の玄妙にして、服氣養霞の長壽を得る所以であることを深く悟つた。

然るに或日一人の道人が居て、手に一個の橘の實を持ち、道を歩きながら次のやうな歌をうたつた。

橘々無人識。惟有姓朱人。方知這端的。
然るに件の道人の容子が如何にも狂氣染みて居たので、人々は皆彼を指して嘲笑ひ、誰一人として其歌に耳を傾けて聽く人がなかつたが、獨り朱橘のみは件の歌を聞て大に喜び、彼の跡に尾行して村端の野原に出た時、突然件の道人を呼留めて、君は鞠君子と名乗る真人ではないかと尋ねた。其時彼道人は自分は即ち鞠君子であるを答へ、更に朱橘の名を聞て大に喜び、彼に皖公山に往て仙道を修行するやうに説勸めると、其儘雲に乗て昇天して了つた。

扱て朱橘は鞠君子に教へられた通り、皖公山に赴て其處に一の庵室を築き、熱心になつて仙道を修行して居ると、此處に一の不思議な事がある。それは毎日

一度何處からとも無く小綺麗な一人の小童が出て來て、朱橘の門前にある池水で手を洗ふて居たが、其動作極めて迅速で、ヒラリ／＼と往來する姿が恰度何か物の影でも揺く様であつた。處て或日附近の人々が此事を怪んで、密と彼の歸路を窺ふと、件の童子は忽ち朱橘の家の中へ入つて行つたので、人々も續いて其後から這入て見ると、内には唯一人朱橘が端然と室の真中に座して居るのみで、外に鼠一匹の影さへ見えなかつた。其處で彼の人々は件の童子は全く朱橘の分身であるを始めて悟り、是より益々朱橘を尊敬する様になつたさうである。

宋の理宗皇帝の淳祐二年の某日、朱橘は郷人の陳六と云ふ者に向て、自分は今縣廳の官舎の前に立て仙化しやうと思ふから、汝は其時清い土を以て自分の身體を上から塗り蔽ふて呉れと頼み、扱て陳六が其言通りに泥を以て彼の遺骸を塗り隠すと、其處へ會博羅吏が酒に酔ふて遣て來て、件の泥を塗つた朱橘の遺骸を見ると、大に笑ひ出し、土偶とても思つたものか、杖を執て之れを撲毀すと、泥土は四邊へ碎け散て了つたが、不思議なことには、朱橘の遺骸は何處へ行つたのか、已に消え失せて無くなつて居た。

郝大通

郝大通は寧海の人で字は太古といひ、恬然子とも號して居た。幼少の折父親に別れて獨り母親に事へて居たが、極めて孝心の深かつた人で、近隣の者共から非常に敬愛されて居た。然るに或夜夢に一人の神人に遇ひ、周易の秘義を授けられ、其れから自然と律曆卜筮の術に通じて、凡そ未來の吉凶禍福を言ふに一として郝的中しないものは無かつた。而して重陽が寧海に來た時、其門に入て仙道を修行し、其後岐山に於て復た一人の神人に遇ふて



重ねて易の蘊奥を示された。

或日彼獨り端然と趙州の橋の上に座して居ると、附近の小兒達が澤山集て來て、小石を拾取ては彼の頭の上に載せ、忽ち小さい小石の塔を築いた。其時郝大通は目を閉ぢた儘黙て小兒の爲す儘に打任せて居ると、小供等は頭を傾けて頂上の塔を壊さぬやうに堅く郝大通を戒め、扱て互に手を拍て囃したてながら終日彼の周圍を驅け廻て居た。處が二三日經つと雨が降續いて河水が俄に氾濫し、水が膝の上まで届いたけれど、彼は橋の上に座つた儘一寸も其處を動かかなかつた。

斯くて彼は趙州の橋の上に座つた儘、石地藏のやうに六年間其處を動かかなかつたが、其後其處を立去て寶慶三年寧海の先天觀に於て尸解仙化して了つた。に年一十有三である。

賣薑翁

賣薑翁は何處の人で名は何と云ふか明かでない。衡州の市街に出て毎日薑を賣て居たが、其れから三十餘年後になつても容貌常に若々として居て少しも

變らなかつた。處が或時一人の道士が居て彼に向ひ、自分は黄金を製するの術を覺えて居るが、誰か確乎しつぱした者に逢ふて其術を傳へて遣度いと思て居ると言ふと、賣菘翁は何とも其れに答へず、店に出して居た一塊の菘を口の中へ入れて之を吐出すと、それが忽ち黄金となつた。其時二人は互に顔見合せ、手を拍て笑ひ、轉まげながら、暫時たつと一所に連立て何處へか立去て了つたが、其後再び彼の姿を見た者はなかつた。

顏筆仙

顏筆仙は高郵の人である。幼少の時から落魄して諸方に流浪して居たが、宋の寶慶初年筆を賣つて辛うじて生活をして居た。然るに或日一人の仙人に遇ふて仙道を授けられてからは彼の容子俄に一變し、日に筆十本を賣れば其れて其日の店を閉ぢて了ひ、誰が何と云ても商を爲なかつた。

處が或日一人の轉運使と連立て酒を飲むことがあつた。其時顏筆仙は略一斗計りの酒を飲み盡して其處を立去つた。然るに彼は其携へて居た筆を轉運使の舟の中へ置忘れて立去つたので、件の轉運使は傍の人々に命じて、件の筆を

彼の許へ送り返さしめやうとすると、其重さ千斤程もあつて、一人の方では到底も其れを持擧ぐることか出来なかつた。其時或一人の男が居て之れを訝しく思ひ、試に其中の一本の筆を裂て見ると、管の中に一篇の偈を認めた紙が一枚入つて居て、其れに筆を裂いた人の姓名と其人の未來の禍福と、外に其筆を裂き割つた月日、が明かに記されてあつた。そして又何の筆を取て裂てみても皆同様に其年月日姓名未來記が一々書き記されてあつたので、それから世の人々は彼を稱して筆仙と呼んで居た。

彼は年九十七の時、或日葦を庭前に堆高く積み重ね、自ら其上に坐して火を點け、其火焰に乗て遂に昇天して了つた。

藍喬

藍喬は宋の龍門の人で、進士の試験を受けたけれど落第したので、それから彼は霍山に隱退して常に笛を吹き詩を賦して獨り樂んで居た。其詩に次のやうなものがある。

太一亭前是我家。滿床書史足生涯。春深帶酒不歸去。老却碧桃無限花。

然るに或日彼は我こそ即ち羅浮山の仙人であるといつて、突然飛昇して了つた。其後或人が彼に洛陽の市中で出逢ふた時彼は縊縷を身に纏ひ、或酒屋で酒を飲んで居たが、澤山の紙を自分の足の下に積み重ね、傍の人に命じて其紙を一枚づゝ引き取らしめると、彼の身體は非常に軽かつたので、紙を一枚宛足の下から抜き取るに、決して破るゝといふことが無かつた。

斯くて彼は足の下の紙を抜き去らしめて、樂んで居たが、暫時すると、彼の身體が自然と空中に浮き上り、略十數尺の高處に到つた時、何處からともなく一羽の鶴が飛んで来て、彼を背にのせて飛び去つて了つた。其時空中に於て何處ともなく笙簫の音が聞えてあつたとの事である。

周史卿

周史卿は浦城の人である。宋の淳祐年間一人の異人に逢ふて養生の秘訣を授けられ、それより油果山に上つて略二十年計り修煉し、仙丹漸く出來上らんと爲た時、或晩雨風雷鳴烈しく起て、長年の間丹精を入れて作り上げた仙丹は、其夜何者にか盜まれて了つた。其處で史卿は自分は是れから神魂を飛して治ねく

六合の中を探求めるから、自分の遺骸は暫時の間大切に保護を爲て置いて呉れ、七日目には決と歸て來るからと妻に告げて、其儘身を横にすると、忽地息氣が絶えて了つた。

然るに六日目になると、此處に一人の僧侶が訪ねて來て、彼の妻に向ひ、一體道士と云ふ者は、唯精神のみを重んじて形骸は糞土の程にも思ふて居無い、否寧ろ却て自分の心を累はす邪魔物位に思ふて居る。故に遺骸などは一日も早く焼き棄た方がよいと説き勧めたので、妻は迂乎其言葉を信用し、史卿の遺骸を焼き葬つて了つた。

然るに其翌日になつて果して史卿の神魂は歸て來たけれど、今は宿るべき形骸が無いので、二三日家の附近を彷徨して居たが、或日空中に只聲のみが爲て、痛く妻の不心得を叱るやうであつたが、其後何處とも無く立去て了つた。

李笈

李笈字は定國といひ、濟南の人である。或日西湖の淨慈寺に往かうと思ふて、一の長い橋を渡り深い竹林の中を通ると、誤て路を踏み違へ、幾何行てもく竹

林が盡きない。そして此方の小徑こみち彼方の小徑と彷徨ふて居る中、益々迷亂して下つて、如何しても其竹林を通り抜けることが出来なかつた。其處で彼は途方に暮れて暫時其處に佇んで居ると、不圖彼方に一人の道士が居て頻りに筇を掘て居るのを見付けたので、大に喜び、早速其側へ近寄て淨慈寺に到る路を尋ねると、彼の道士は唯黙て自分へ隨まて來いと言て、遂に彼を自分の家へ連れて行き、筇を焼いて御馳走を爲た。處が其筇の味は滅めつ法界美味しく、とても他所では食へることの出来ぬものであつた。

須臾すると一陣の風が颯と起て來て、俄に雨が降出し、四邊が急に晦くなつて來たかと思ふと、今迄あつた道士も家も忽ち消え失せて了ひ、やがて風雨も收まり、空も舊の如く霽れて來て見れば、自分の身みは何時の間にか淨慈寺の門前に立て居た。

此事があつた後彼の身體は急に軽くなり、路を歩くにも恰も飛んで居るやうで、五六里の道は瞬く間に往復することが出来た。そして其後は彼は一切飲食を廢して居たが、後蜀の國に入り、青城山に上つて其處に住んで居た。

彼の從兄に李莫といふ者が居て、梓州路の提刑となつた時、人を蜀に遣して李

李仲甫

筇を尋ねしめたことがあつたが、それより先立つこと數年前彼は已に雲にのつて昇天して了つて、其時は唯其繪像のみが遺て居たさうである。

李仲甫は豊邑の中益里といふ處の人で、幼少の時道を王君に學びて水丹を服し、遁甲の法を行ひ、出沒變化自在であつた。そして年は百歳以上になつたけれど、容顏少しも衰へず、常に少年の様な顔をして居た。其後彼は暫時の間、姿を隠して居たが、唯其聲のみは之れを聞く事が出来てあつた。即ち人と對話する事や、飲食する事は平日と少しも變りはなかつたけれど、唯其形丈は如何しても見る事が出来なかつた。

此處に養生に張某といふものが居て、李仲甫に従て其隱形術を學んで居たが、唯性質が燥急で、そして極めて偏屈であつた爲め、少なからぬ勉強と努力とを費したけれど、如何しても成就する事が出来なかつた。

其處で彼大に腹を立て、或日匕首を懷にして李仲甫の許を訪ね、種話に紛らし、て仲甫の油断を見濟し、聲を便りに突き進み、隠し持つた匕首を振廻して此處ぞ

と思ふ處を無闇に切り拂つた。其時側の床の上に當てカラカラと笑ふ仲甫の聲がして、道を得られぬ遺恨に却て自分を斬り殺さうとは盲者蛇に畏れぬ迂痴者である。自分は其方如き者の謀計にかゝつて、おめく撃たるゝ如き者と思ふか、もし自分の手練の程を知りたいと思はゞ、一つ懲の爲めに見せてやるまいものでもないと言て、或人に命じて其處へ一匹の犬を曳いて來らしめた。そして件の犬がヨロヨロとよろけながら張某の前に來たかと思ふ途端、ト大地に躓いて倒れたかと思ふと、其儘犬の頭は驅を離れて二三間先に飛び落ち、腹は一文字に切り裂かれて了つた。其時忽ち仲甫の聲がして、強て自分に對して敵意を挟むならば、不憫だけれども今此の犬の通りに爲てやるが、如何だと言つたので、之を聞いて張某は膽を潰し、急に匕首を後方へ投げすて、大地に匍匐して厚く其罪を詫びたので、仲甫は彼の罪を許してやつた。

仲甫に一人の親友が居て、互に五百里の餘も離れて居たが、此者は平生羅を張て小鳥を捕へて貧しい生活をして居た。處が或日羅に一匹の奇妙な鳥がかゝつた。能くく見るとそれは即ち李仲甫であつたので、友人は大に驚き、其無事であつた事を祝して自分の家へ連れて歸ると、仲甫は其一日楽しく物語した

後、又其夜の中に再び自分の家へ歸つて來た。此事があつた後、彼の友人は大に悔悟する所があつて、以後小鳥を捕ふことを止めた。扱て仲甫は人間界に在る事前後三百年ばかりで、其後西岳山に上つたが、再び其山を出て來なかつたさうである。

莫月鼎

莫月鼎諱は洞一字は起炎、潮州の人である。眉目清秀、肌膚深くして玉の如く涼しい眼の底には一種の光があつて、見る時人を射る。成長した後、青城山の丈人觀に往て徐無極に謁え、彼に従て五雷の法を受けた。

此處に南豐といふ處に鄒錢壁といふ賢者が住んで居て、王侍宸の斬勘雷書を秘藏して居るけれども、滅多に人に示さなかつたが、月鼎或日之れを聞て、如何にかして右の秘書を一見したいと思ひ、色工夫を凝らした末、遂に奴僕となつて彼の許に住み込んだ。斯くて數年経つ中、鄒錢壁はフト病にかゝつて最早生命も旦夕に迫つた時、莫月鼎は或日隙を見て自分の切なる望を打開け、右の秘書を自分に傳へて呉れと泣いて歎願した。すると鄒錢壁は其殊勝な心掛に痛く感動

して遂に右の秘書を取出して彼に授けた。

是より莫月鼎は自ら雷師となつて種々の鬼魅を自由に驅使することを得るやうになり、彼が一度口を開いて笑へば、地上の草木は自然と花を開いて陽氣天地に満ち亘る。然し反對に一度眉を揚げて怒る時には、忽ち風雨山を崩し海を翻し、鬼神も其威に懼れて屏息するのであつた。そして彼は平生酒を好み、暇さへあれば能く酒を飲んで居たが、酔が廻る頃になると、即ち眼を据えて屹と天上を睨む、すると何處からとも無く一陣の颯風が颯と起て來て、陰々たる腥氣忽ち室にみちくして來る。

元の世祖皇帝或日彼を朝廷に召寄せ、折柄麗かに晴れ渡つた天氣を見て、今急に雷鳴を起すことが出来るや否やと尋ねられると、月鼎は快く承諾し、一個の胡桃を取て、ハタと地上に擲つと、今迄の晴天忽ち墨を流したやうに掻曇り、紫電空を裂き、百雷天地を轟かして鳴出した。其時皇帝は更に雨を降らして見せよと仰せられると、其聲が未だ止まない中に、車軸を流すやうな大雨が沛然と降て來た。そして暫時して再び雷雨を收めて呉れと命ずると、雷も雨も忽ち收つて復た舊の晴天となつた。其處で皇帝は大に彼の神通を賞せられて、金縉の類を數

多下されたが、其時彼は件の贈物を悉く貧しい者に頒與へて、自分は何一つ身に取らなかつた。

曾て或時西湖に舟を浮べて、客と杯を獻酬して居た。時しも夏の最中で、上から照りつくる日光が暑くて堪らなかつたので、客が彼に雲を起して日光を遮るやうに頼むと、彼は快よく諾して、舟を圍ある岸に着けて獨り上陸し、暫時すると何處からか木の實の殻を一個拾ふて來て、それを觥の中に浮すと、見る／＼空の一方から墨雲が起て來て日光を掩ふて了つた。又或年の中秋、菴觀の道士が折柄の名月を賞せん爲め、數多の知人を招いて酒宴を開くことがあつた。其時生憎雲が出て來て月を掩ひ隠して了つたので、折角の興も稍、醒めさうになつた時、主人の道士はフト觀内に莫月鼎が寄寓して居たのに、自分は迂乎彼を此席に招くことを忘れて居た爲め、却て彼の怒を買ふたのであらうと氣が注いたので、急に人を遣して彼を座敷に招き、種其罪を詫びた。其時月鼎は何も言はず、唯片頬に微笑を湛へながら手をあげて天上を指すと、不思議や、今迄有つた雲は忽ち何處へか失せて了つて、一座樂しく觀月の歡を盡すことを得たさうである。

此處に又或山里に一人の男が居て、或妖鬼に憑れて物狂しくなつた時、月鼎は

口に酒を含んで彼の面に嘔くと、件の病は忽ち治て了つた。又此處に一人の餅を賣て居る爺が居て、或夜御孫の爲めに筐の中の餅を悉く盗去られた時、月鼎は印を結んで雷神を召し、或町の上に到て頻りに雷鳴を轟かさしめて、其町内に潜んで居た彼の御孫を八裂に爲さしめて、餅賣爺の爲めに仇をとつて遣つた。又此處に一人の男が居て、或年一人の婦人を娶ると、其婦人は途中で或白猿の爲めに奪去られて了つた。其時月鼎は彼の男の門前に立て居て、何か頻りに物を招く態を爲て居たが、暫時經つと、俄に一陣の颯風が吹て來て、件の盗まれた婦人が何處からともなく歸て來た。

斯様に莫月鼎は種々の仙術を以て、人民の難儀を救ふて居たが、年七十三になつた時、或日弟子の一人王繼華といふ者に自分が明年の正月十三日に仙化する由を告げ、愈、其日になると、今迄晴天であつた空が俄に掻曇て風雨烈しく降り、電光閃めき、雷鳴轟き、天地も今に覆らん有様であつたが、月鼎は心靜に筆を執て辭世の偈を作り、其儘眠るやうに卒して了つた。そして息氣が絶えた後でも彼の顔は眞赤であつて、恰も朱で染めたかのやうであつたとのことである。

王處一

王處一は寧海東牟の人で玉陽と號して居たが、彼の母は周氏といひ、彼を産む時、紅の霞が天上から降りて來て、煙のやうに自分の身の周圍を取圍むと夢みたさうである。

王處一未だ幼少の時分、或日獨り山中に遊んで居ると、傍の石の上に一人の老人が坐て居て、彼を見ると、汝は成長したら道教の宗主となつて名を天に揚ぐるであらうと告げたが、後果して左様であつた。

太定八年彼は重陽祖師を全真庵に訪ねて、其弟子となり、それから始終重陽に従て諸國を遊歴して居たが、後終に仙道の正法を悉く授けられた。然して彼の母も亦重陽に従て仙道の要訣を授けられ、玄靜散人と稱して居た。

重陽曾て弟子の圓陽等と共に龍泉に遊んだことがあつた。時は恰も夏の最中で、日光が熱くて堪へられなかつたから、重陽は日傘を差翳して道を歩いて居ると、其傘が突然彼の手を放れて空中に飛び上り、何處ともなく飛去て了つた。處が暫時すると、件の傘は其時會、鐵查山に在て道を修煉して居た王處一が庵の

前に墮ちて來た。其時王處一は不審に思ふて件の傘を熟視すると、それは即ち祖師が持て居た傘で、其柄に祖師の名刺が結付けられて居た。龍泉から彼が居る所の鐵查山までは、其里程殆んど二百里計りあるのを、件の傘は僅か十數分間て飛んで來たのである。

其後王處一は又雲光洞に住んで居たが、其傍に一の懸崖があつて、幾百尺の下には底知れぬ深い淵が蒼い水を湛えて居る。處が或日彼は此懸崖の上に足を翹て、立つた儘、數日間少しも動かなかつた。其處で之れを見た人々は皆彼の健脚なのに驚いて、それから彼をば鐵脚仙人と呼んで居たさうである。

太定二十七年元の世宗皇帝から召されて朝廷へ伺候してあつたが、章宗皇帝即位の二年復た召されて便殿へ出仕した。其時皇帝は彼に向て、汝は何事を尋ねても早速返答に及び、世の中には是れと云て知らないものは無いやうに見受くるが、扱て如何して汝は左様に博識になることが出來たかと尋ねられると、王處一は顔に微笑を湛へ、試に彼の鏡を御覽あれ、其性明透であるによつて如何なる物でも其影を映さないと云ふことがない、況してや天地の大鑒は如何な幽隱なものでも照し映さないものは無い。て、此大鑒に向ては天地間に有りとは有らぬ

る總ての物皆其形を隠すことが出來ぬ。然らば此天地の大鑒とは何であるかと申せば、それは即ち我々の身に有して居る此靈明な心性であると答へた。皇帝之れを聞て、清明身に在り、志氣神の如しとは眞に先生のことであらうと被仰て、痛く彼を賞讃せられた。

此處に玉虛觀と稱する道院があつて、其境内の水洞の前に一個の岩石が斜に道の上へ數十間計り突出て居て、其下を通る者は誰でも皆危み懼れて居た。其處で人々は件の岩石を他の場所へ移さうと談合して、數多の工夫を呼集めて、其岩石を打碎き始めたが、何と云ても格外に大きい岩石であるので、十數日かゝつて僅に其百分の一程、打碎くに過ぎなかつた。其時王處一は之を見て大に笑ひ、自分が一つ試みて遣らうと言ひ、機件まきまの岩石に近寄り、鐵槌を以て三度其石を叩くと、不思議や怖しい響と一所に件の岩石は其の根元からホッキと折れ、下の壑へ墜落して了つた。

其翌年の四月某日彼は沐浴して身を清め、新しい衣冠裝束をつけ、香を焚いて天地四方を禮拜した後、眠るやうに息氣が絶えて了つた。彼が著した雲光集と云ふ書は廣く世に行はれて居る。

李靈陽

李靈陽は京兆の人である。人と爲り沈黙寡言、學博く識高く、才智衆に優れて居たが、或日一人の神人に逢ふて抱一符火大丹の秘訣を授けられた。そして彼は日頃から玉蟾、重陽とは親しい朋友で互に往復をして居た。處が或日丹陽、丘、劉諱の四人打揃て彼の許を訪ねたことがある。

是より先き、靈陽は豫め彼等四人の訪ねて來ることを知り、終南といふ處の或茶屋の主人に豫め此事を告知らして錢を拂ひ置き、若し件の四人が見えたら店へ呼入れて、充分馳走を爲て遣て呉れるやうに頼んで置くと、果して其日になつて件の四人が遣て來たので、茶屋の主人は一々四人の名を呼んで座敷へ招じ入れ、種々と酒肴を出して御馳走を爲た。其處で丹陽は先づ不審に思ひ、如何して我々の名を知て居るか、と店の主人に尋ねた時、主人豫め李靈陽から聞て知て居ることを告げたので、件の四人は今更靈陽の神通宏大であるのを感嘆してあつた。李靈陽は前にも述べた通り、重陽とは極めて親しい間柄であつたので、彼等四人の者も平生彼を尊敬して師叔と稱して居た。

張金箔

張金箔は山西平陽の人で頗る幻術に達して居た。或日濟源にある湫水の古蹟へ尋ねて行き、流水に對して暫時沈思默考して居たが、やがて斯様な大湖の出來たのも、要するに一の工夫に過ぎぬと感ぜ、其後家へ歸ると、直ぐ家の後の空地を鑿て一の池を作り、外から水を通じて周圍に樹木花草を栽え、其畔に几案ツマを設けて終日其處に坐つて樂んで居た。

處が或日一人の年老つた道士が尋ねて來て、聞けば君には頗る幻術に達して居らるゝよしてあるが、如何なる術を知て居らるか、それを拜見に參つた由を通じたので、彼は件の老人を彼の池の畔へ連れて行き、此池は自分の術を以て造つたものであることを告げると、彼の老人は片頬に微笑を湛へ、如何にも美事な池であると賞めた末、他日一所に寒寓に遊んで一日楽しく遊うてはないかと約束して、其日は其儘歸て了つた。

それから數日經つと、襄の道士の許から二人の童子各龍に乗て張金箔を迎ひに來て、そして彼を一の高い山に連れて行つた。其處は山深くして白雲常に谷

を鎖し、松杉天に聳えて居て、遊さへ物凄く、青苔路を埋めて殆んど人跡も打絶えた山奥である。

と見ると、向ふの圓い岩壁の上に彼の老人が坐て居たが、張金箔を見ると、老夫は此穢れた塵の世を歩くのが厭さに、二本の脚は彼の通り向ふの壁へかけて居るので、今直にそれを取て来て君に會釋を爲るから、暫時の猶豫を願ひ度いと言て、ハタ／＼と手を叩くと、側の壁の上に懸けて置た二本の脚が、此時此方へ飛んで来て彼の腰の處に附着くと、彼の老人は漸う岩の上から下りて来て、丁寧に彼に會釋を爲た。そして張金箔に向て、君は其持て居る術の爲めに後日却て身を誤ることがあるから、一層のこと家を此處へ移して共に仙境の樂を享けることに爲たら如何かと尋ねた。其時張金箔は御芳志は千萬忝いが、然し自分は固く不肖の性質で、左様な洒落た真似は到底も出来さうにもないからと答へて、堅く辭退すると、件の老人は囊の二人の童子を側近く呼び寄せて、何事か密々と囁くと、彼の童子は一々承領して何處へか立去て了つた。暫時經つと老人の姿が忽地消え失せて、家に留めて置た筈の妻子を初めとして、一家の僕婢が忽然として彼の目の前に現はれた。て、彼は大に驚き、言を發して其故を訊質さうとすると、

忽地其影が又消え失せて了つた。

扱て張金箔は件の老人に留められて、心ならずも其處に數ヶ月を送て居たが、前々から竊に里へ出る路を探し求めて置たので、或日意を決して其處を逃出し、漸う自分の家へ歸て來ることが出来た。そして妻子共に山の中で見開した一伍四什を物語て、終に彼等に自分の留守中何も變つたことが無かつたかと尋ねて見ると、別に變つたこともなかつた様子で、此半年計りは全く家の中にのみ閉籠て居て、何處へも出掛けた者が居ないと妻が答へた。

其後元の高皇帝は張金箔の幻術に達して居ることを聞き、或日彼を朝廷へ召し出し、其幻術のとを尋ねられた。すると、彼は迷を以て種々の幻術を行ひ、又は空な瓶の中に五色の雲を起す術を知て居ることを答へたので、然らば一つ此處で遣て見せよと被仰られた。其處で張金箔は委細承つたと答へて、袖の中から一の鐵瓶を取出し、其中へ水を一杯注込んで、五枚の神符を其中へ入れて、種々奇態な手振を爲た。やがて其瓶の口から一縷の煙のやうな物が立上つたかと思ふと、俄に五彩の雲が簇々と立上り、見る／＼殿上殿下に充滿して、日光に相映じ、燦爛と耀き渡つた。

次に張金箔は澤山の蓮の實を持って来て池の中へそれをふりまくと、須臾して蓮が池の中から芽を出し、見る間に葉が繁り、花が咲き、紅蓮白蓮相映じて奇觀此上も無い。其時彼は更に紙を剪て小船の形を作り、それを池の上に浮かすと、忽ち地それが龍頭鰲首の美装を凝した大船と爲り、靜々と波を掻き分けて池の中央へ押進むと、何處からともなく十數名の美人が立現れて、伴の船に乗込み、蓮を採りながら採蓮の歌を節面白く謠ひ出したが、清銳にして玉を轉がすやうな美音は四邊に響き渡り、之れを觀て居た皇帝を初めとして、並み居る人々は皆恍惚として夢路を辿る心地がした。そして皇帝は思はず聲をかけて讚嘆せらるゝと、今迄あつた蓮の花も、船も、美人も、張金箔の姿も皆一時に消え失せて了つた。其後張金箔の行衛は誰一人として知る者はなかつた。

張中

張中字は景和といひ、臨川の人である。或年一人の異人に逢ふて太乙の數を教へられたが、其後彼は人々の運氣を判斷するに、それが一として當らないものは無かつた。而して彼は平生頭に鐵冠を戴て居たので、世の人々は皆彼を鐵冠

道人と稱して居た。其後彼は明の高皇帝に仕へて居たが、戰爭ある毎に先づ陣頭に立て、戰氣を望み見て、豫め其日の勝敗を判斷するに、其言葉一として違ふことが無かつた。鄱湖の戰に漢の大將陳友諒といふ者が流矢に中て死んだ時、兩軍の兵士未だ之れを知らない中に、彼早くも氣を望み見て、此事を知り、皇帝に勸めて急に兵を進ましめ、遂に大に漢の軍を打敗つたことがある。

徐の武寧王は國富み兵強く、其勢頗る振て居たが、張中或日王の兩額が赤色を帯び、目の光が火の様に赤いのを見て、或人に向て王の壽命は恐らくは中年を越すまいと言てあつたが、果して王は年五十四で死んで了つた。

此處に梁の國の太守に藍玉といふ者が居て、或日酒を携へて張中の庵を訪ふた。其時太守は張中が不斷着の疎末な衣服を着て出迎ひたのを見て、心中頗る不快に感じたので、戲談半分に、自分は今一の俚語を知て居るから、先生それに答へて呉れと言ひながら、脚芒履を穿て賓を迎ふ、足下禮なしと聲高かに言ふと、張中は太守が手に持て居た椰やしで作つた杯を指し、手に椰瓢を執て蓋となす、尊樽とは相前忠あらずと答へてあつたが、此藍玉は其後果して反逆の罪を以て誅戮せられたさうである。

其後張中は都の邊りに數年留て居たが或日何の理由もなく大中橋から水中へ身を投げて死んで了つた。其時高祖皇帝は種々と力を盡して彼の遺骸を搜索せられたけれど遂に發見することが出来なかつた。然るに其後數日經つと潼關の長官から數日前鐵冠道人が關を經て何處へか立去るのを見たと上申して來た。

張三丰

張三丰は遼東懿州の人で名は君寶字は玄々身の丈七尺に餘り耳大きく目圓く鬚髯は針金の如くて頭の頂に一個の髻を結び手には常に刀尺と笠とを持て居て其風態が如何にも奇妙であつたので人々は皆張獼猴張三丰と稱して居た。そして彼は歩けば日に千里の遠い處も往復が出来靜に目を瞑つて座て居れば數月の間何も食わずに眠として居ることが出来る。然し一度舌鼓を擧て啖ひ始めると幾何でも是れて滿腹したといふことが無く數十人分の食量を一人で平げることがあつた。元の末年寶鷄金臺觀に於て或日辭世の頌を書いて突然死んで了つた。其時楊軌山といふ僧侶が居て彼の遺骸を葬らうとして、ト其棺

を開いて見ると今迄死んだと思つた張三丰が忽ち蘇生して起上つた。而して其後蜀の國へ赴き洪武の初年同國太和山の王虛宮の門前に一の庵を構ひ暫時其處に留て仙丹を煉て居たが其庵の前に大きな古木が五六本茂て居て彼は暇ある毎に其下へ行て遊んで居た。そして虎狼の猛獸が其側を通ることがあつても彼等は彼に對して少しも危害を加へなかつた。其後彼は武當山に住み其處に二十三年計り留て居たが或日突然姿を隠した限り終に其行方が分らなくなつて了つた。

永樂の初年皇帝正一孫碧雲に勅して武當山に一の宮を建て其處に彼の像を安置してあつたが天順年間更に通微顯化真人の尊號を贈られた。而して其後張三丰は時々姿を現はして其奇蹟も少なくなかつたが然し何處に住んで居るのか彼の住所を知て居る者は一人も無かつた。

周顛仙

周顛仙は本名何といふか詳でない自らは南康の建昌に生れたと云て居たけれど其眞偽は明かでない。年十四の時顛疾を病んで南昌といふ處に三十年の

餘乞丐をして居たが、彼に一の奇妙な癖があつて、其處の知事が交代して新知事が赴任する度に、彼は先づ必らず其人の面會を乞ひ、天下の太平無事であることを告げるのを習慣として居た。是れは當時元の天下が能く治て居て、人民皆々安堵して居るけれども、此時已に天下が復た亂れんとする兆が現はれて居たので、彼は特更に斯様なことを爲して太守に警告を與へてあつたのである。而して又高皇帝が都を出て地方に行幸なさるゝ折には、彼必らず鳳輦の前に拜謁して、例の如く太平の言葉を奏上して居たが、皇帝も餘りと云へば毎度もく煩いので、此語を聞くことが如何にも厭々て堪らず、或日顛仙に多量の燒酒を飲ませしめたけれど、彼は寸許も酔ふた氣色が見えなかつた。其處で皇帝は更に彼を亡き者に爲やうと思召し、種々と計略を運らした末、彼を大きな缸の中に入れて火を以てそれを外側から燒き、暫時して蓋を開けて見ると、彼は缸の中に座して居て、生命に聊の別條もなかつた。其後皇帝は彼を蔣山寺に留めて置かれたが、平素彼の舉動を見るに甚た普通の者と異つて居て、實に奇怪不思議なことも少なくなかつた。即ち幾何食べてもこれで満腹したといふことはなく、又幾日斷食して居ても、それで餓ゑるといふことが無かつた。

皇帝或年九江の賊を征伐しようと思召して、彼に今度の勝敗を尋ねられると、彼は空を仰て暫時屋根の上を眺めて居たが、稍暫時して容姿を正し、手を左右に搖動し、天上に何等の異つた兆候も見えないから、此戦争は先づ味方の勝利に歸すること疑ないと確答し、其儘軍兵の前に先驅して、杖を揮て如何にも敵を撃つ態を爲して、今度の戦には必らず勝つといふ意を示した。

扱て皇帝は軍を進めて皖城といふ處に到り、それから舟を整へて先へ進まうと爲たけれど、折柄少しの風も無かつたので、舟を前へ進ませることが出来ず、大に困り切て居られた時、顛仙は構はないから只先へ進み玉へと勧めたが、矢張何處まで行ても風が無いので、皇帝は衆を勵まして舟を曳かしめ、漸う三里計も来たかと思ふ頃、遽に狂飈が起て來て、船は見る／＼風に吹流されて圓ある孤島へ漂着した。其時群臣の中で兎斯と顛仙のことを悪様に罵る者が多かつたが、彼是する中、或者が馬當の邊りに數多の江豚が水中に戯れて居るのを見て、此由を皇帝に上奏すると、顛仙は傍に居て之れを聞き、扱ては愈、水精が現はれたか、此様子ではさを數多の軍兵が災害に罹ることであらうと言つたのを皇帝聞て大に腹を立て、軍兵に命じて直様彼を江の中へ投棄るやうに命ぜられた。すると暫

時經て件の兵士共再び顯仙を連れて戻て来て、彼を幾度か水の中に投込んだけれど、矢張直ぐ舟の中へ戻て来て、兎ても我々の力では彼を水底に押沈むることが出来ないと言て、其事の要概を皇帝に上奏したので、流石の皇帝も呆返り、彼を殺すことを思止つて一所に食事を爲された。

扱て食事が濟むと、顯仙は種々身仕度を爲直して、遠く旅行でもするやうな態を示し、やがて皇帝の前に腰を屈めて、何卒自分を殺して下さいと言ふと、皇帝はニコニコ笑ひながら、否殺すことは堅く思止つた。唯是れから汝の自由に任せらるから、廬山でも何處でも汝の思ふ處へ出て行くがよいと、暇を遣すと、彼は丁寧に暇を告げて何處へか立去て了つた。其後皇帝は親ら文を作て彼の傳を記し、それを石に録して廬山に長く留めて置かれたさうである。

冷謙

冷謙字を啓敬といひ、洪武の初年協律郎となり、郊廟に奏する神樂の歌詞を多く撰定してあつた。而して彼の友人で貧乏で困て彼の許へ多少の助力を求めて來る者があれば、彼は其者を或一室に連れて行き、側の壁の上を指すと、其處に

忽然として一個の門が現はれ出る。而して能く見ると一羽の鶴があつて其門の番を爲て居る。其時彼は友人に命じて件の門を軽く叩かしむると、門は自然と左右に開き、中には壯麗な金殿玉樓が軒を列べて建て居る。其時彼は友人を連れて金銀財寶を堆高く積んで居る室へ案内し、友人に入用な文け幾何でも金銀を取らしめる。

處が或日朝廷の内庫で金が紛失したと云ふて大騒が起つた。巡邏は互に相戒め合ふて密々盜賊の行方を探して居たが、遂に冷謙の友人某が夥しく金銀を所有して居ることを發見し、怪んで彼者を拘引して嚴しく鞫問した末、右金銀の出所が明かになつたので、冷謙は直ちに拘引されることになつた。其時彼は巡邏から喉が渴えて困るからと云て、瓶に少量の水を貰ひ、悉く其水を呑んで了ふて、やがて足を件の瓶の口に當てると、彼の身體はスル／＼と件の小さい瓶の中へ入つて了つた。

之れを見た巡邏共は大に驚き、汝若し其處から出て來なければ我等も同じく死罪に行はれる、由を告げて、一向彼に瓶の中から出て來るやうにと歎願した。すると冷謙は瓶の中から聲をかけ、心配するな、汝等には別に迷惑をかけないか

ら唯此儘自分を朝廷へ運んで行けばよいのだと言つたので、巡羅共も致方なく件の瓶を持って皇帝の御前に伺候し、委細包まず言上に及ぶと、皇帝冷謙に向て、決して汝を殺すやうな事が無いから、早速瓶の中から出て来いと命じた。すると冷謙は自分は今日罪人である故此處から出る譯には參らぬと頑張ごんぱうて、容易に聽入れない。皇帝之れを聞いて好し、此方に思ふ旨があると、急に側の人々に命じ、彼の名を一聲呼び懸けると同時に、鐵槌を以て件の瓶を粉微塵に打碎かした。塵の如く四方に飛び散つた瓶の破片は此時一々聲を發して、應々と答へたが、冷謙の姿は何處へ行つたか遂に見えなくなつた。其後數年經つと、或人が蜀の國で彼の冷謙にフト出逢ふたさうである。

翟天師

翟天師ていあし名は乾祐といひ、峽中の人で、何時頃の人であるか詳でない。暇さへあれば家にあつて寝轉ねまわりて居たが、身の長け六尺、掌の大き一尺餘、立て禮を爲る時に掌が胸を隠して尙ほ少し餘る位であつた。晩年になると、折々人々の未來を豫告してあつたが、それが一々驗があつたの

で大に人々から尊敬せられて居た。そして彼が山に行くと何時も數多の虎が集て來て、彼の後に附從て居たさうである。或年彼夔州べいしゅうの市に行て大聲を張上げて呼はるゝやう、今夜八人と呼ぶ者が此市を通るから能く親切に待遇して遣れと。然し人々は其は何の意味であるか少しも悟らなかつたが、其夜になつて俄かに火が起り、數百家を一夜の中に燒盡して了つた。其處で始めて彼が八人と云つたのは火を指して言つたものであることが分つた。

或年彼數多の弟子を引連れて、或江の畔て月を賞して遊んで居た時、弟子の一人が彼に向て、月の中には何が在るか尋ねた。其時天師は唯笑て手をあげて月を指したが、それが弟子共には何の意味か薩張り解らなかつた。て何の事であるかと重ねて尋ねると、彼は自分の指勢さしぢせうに従て月の面を覗て見よと言ふので、弟子共は皆、其通りにやつて月の面を覗くと、數多の金殿玉樓が軒を連ね、甍を並べて、月の表面に聳えて居るのが見えた。ハツと思て再び眸を定めて覗ると、甍の樓殿は忽ち消えて見えなくなつた。

陽狂

陽狂は蜀の國の道士で俗に灰袋と呼んで居た、即ち翟天師が晩年の弟子である。才智兼に優れて居たけれど深く其鋒芒を隠して居たので、之れを知て居るものは極めて少なかった。唯翟天師のみは早くから彼の才學を認め、彼は後來畏るべき人物で、年が若いと云て決して侮てはならぬぞと、平生弟子共を戒めて居た。

或年雪が非常に降り積つた時、彼は只一枚の薄い單衣を着て青城山に上り、或寺院に行て宿を乞ふた時、一人の僧が出て来て、自分は見る通りの貧乏生活で寒を凌ぐ蒲團も持て居ないからと云て、氣の毒さうに拒むのを、唯一脚の牀さへ貸して呉れば充分であると言て、自分から足を洗て座敷へ上つた。

扱て夜が更けて風雪が益、吹きつのも、寒氣肌に徹して主人の僧さへ容易に寝付かれなかつたが、隣室の客は如何して居るだらうと心にかゝつてならなかつたので、密と耳を澄して窺つたけれど、更に何等の物音も爲ない。さては惘然さうにも凍え死んだのでは無からうかと、手燭を點して隣室へ行て見ると、件の道

人は牀の上に身を恣せてよく熟睡して居たが、其周圍には暖い蒸氣が絶えず立上て居て、道士は肩を露し胸を擴げて、ビシヨリ汗をかいて居た。是を見て主の僧は始めて彼が普通の者で無いと云ふことに心付き、心に深く尊敬して居たが、扱て其翌日になると、陽狂は未明に飛び起き、其儘何の挨拶もなく、フイと何處へか立去て了つた。

其後彼は多く村里へ出て住んで居たが、然し常に其處此處と轉じて居て、決して一ヶ處に二日と留つて居たことはなかつた。然斯して居る中、或年口瘡を病んで數ヶ月何物をも食へることが出来ず、肉落ち、骨立ち、今にも息の根が絶えなう有様であつたけれど、人々は皆彼が普通の者でないことを知て居るので、別に案じも爲なかつた。然るに或日のこと、村人の誰彼が集て彼が爲めに一の道觀を設けてやらうと相談した時、座にあつた陽狂はソト起上り、自分の口の中には、何があるかと言て、大きな口を開くと、口内の廣さ箕の程あつて、腹中の五臟が悉く外から覗き見ることが出来る。之れを見て、其處に集て居た人々はアツと計りに驚き、一同急に大地に平伏して禮拜した。

其時彼は腹中の五臟を指もて示し、世間で利欲の爲めに身を亡ぼすやうにな

費文樟 四八〇
 るのも全く此物がある爲めて是物こそ最も怖るべきものである。此物こそ最も
 悪むべきものであると繰返して言たが、其後暫時経つと、何處へか立去て了つて、
 再び其姿を見せなかつた。

費文樟

費文樟字を子安といひ、幼少の頃から道を學んで仙術を得て居たが、何時の頃
 からか江夏の辛氏といふ酒舗と懇意になり、閑暇さへあれば其處へ出入して居
 た。そして其家の主人は又彼が酒を嗜むことを知て得て、彼が見える度に必ら
 ず多少の酒を出して御馳走して遣つた。

斯様にして數年経つと、或日彼は例の如く辛氏の許へ遣て來て、厚く此迄の厚
 意を謝し、今日は其お禮に參つたことを告げ、橘の皮を以て側の壁の上に一羽の
 鶴を描き、そして主人に向て客が來て酒を飲む時に、只手を拍て歌ひさへすれば、
 此鶴は自ら翼を張て舞ふてあらうと告げて、フイと表へ出ると、其儘姿は消えて
 了ひ、其後一向彼の消息が無かつた。

扱て辛氏は其後來客ある毎に、客と一所に手を拍て歌をうたふと、件の鶴は忽

羽撃して壁の上から座敷へ飛下り、頸を振り翼を擴げ、歌ふ曲に合して節面白く
 舞ひ收めると、暫時して再び壁の上に返て、復た元の如く描いた鶴となるのであ
 つた。

此事が何時しか近隣の大評判となり、我もく〜と辛氏の許へ來て酒を飲むも
 のが多くなつたので、十年も経たぬ中に彼辛氏は巨萬の財産を儲けることが出
 來た。

處が或日突然文樟が遣て來て、先年の鶴は如何したと尋ねたので、主人は委細
 残らず物語つて、お蔭で非常な金儲を爲たことを話し、何れ心計りのお禮を致し度
 いからといつて、切りに彼を押留めたけれど、彼は自分が來たのは何もお禮を爲
 て貰いたい爲めではなく、少し自分で思ふ所が有てのとであると言て、腰から一
 管の笛を取出し、それを二三回吹奏し初めると、空中から忽ち白雲が降りて來て、
 彼壁に描いた鶴が亦羽撲をして座敷へ飛んで下り、彼の前に蹲つた。

其時文樟は懇に主人に暇を告げ、件の鶴を連れて白雲に乗つて昇天して了つ
 た。

其後辛氏は彼が紀念を長く世に傳へん爲めに、其處に一字の樓を築き、黃鶴樓

と名づけてあつたといふことだ。

劉無名

劉無名は名は何と言て生地は何處であるか詳て無い。或夜燈火の下に坐て居て獨り雄黃を服して居ると、忽然として一個の鬼が現はれ、彼に向て、自分は兼々君を奪ひ去らうと思ふて絶えず其隙を窺ふて居たが、君の頭の上に黄色の光明が浮んで居る爲め、如何しても君の身體に近倚ることが出来ない、それで今君に悉く告げ知らするが、丹藥は一の金と二の石から調劑されて居るのであるから、今其丹を服すれば、君の名は忽ち冥界の鬼籍から削り去られ、却つて天界の仙籍に記入せらるゝてあらうといつて、何處ともなく立去て了つた。

其後彼は或處で不圖青華真人に遇ひ、仙丹の秘訣を悉く授けられた。それによれば鉛は最も上位に位する君主みかみ、汞は其次に位する臣民である、石は更に其下に隸屬する使者のやうな者で、黄芽は謂はば田畑の様なものである。此道理を能く辨へて仙丹を煉れば、造作もなく仙化することが出来るであらうとのことであつた。

其後で彼は心を潜めて仙丹を煉るの術を修行して居たが、其後口の中で汞を煉て金と化するの術を悟り、やがて尸解仙化して了つた。

李常在

李常在は蜀の人で、幼少の時から仙術を學び、數世の間長生して居たが、彼に二人の男の子と一人の女の兒があつて、成長して各々一家を構ふるやうになると、彼は二人の弟子を連れて家を去り、或山へ上て隠れて了つた。そして其時に彼は二人の弟子に命じて、二本の青竹を夫々自分の身長と均しく切り、家を出る時各それを自分の寢床に置いて來さしめた。

然るに右の青竹は、其家人の眼には夫々自分の息子の死骸になつて見え、たのて、家人共は大に歎き悲しみ、厚く其葬式を執とす濟したが、其後略百日餘經つと、或日或人が伴の二人の者共が現在李常在の弟子となつて、山に住んで居るのを發見して大に驚き、急ぎ此事を伴の二人の家族共へ告知した。是と同時に又伴の二人の弟子からして各家人に向けて手紙を送り、委細精しく書認めて遣つたので、家人共は之れを見て大に驚き、急ぎ二人の棺を掘起して中を檢めると、尸骸と思

つたのは矢張り夫々一本の青竹であつたので、家人共は再び驚いてあつたさうである。

斐老人

斐老人は家代々江左に住んで居たが、彼は仙術を得てから閩の地方に遊び、清源山の景色に富んで居るのを愛して、其麓に庵を構へて其處に住んで居た。彼は酒を嗜んで時々杯を手にして居たが、然し何時も三杯と極めて置て、其れ以上は決して飲まなかつた。其處で彼は平生次のやうな詩を吟じて居た。

好酒啜三杯、好花挿一枝、思量今古事、安樂是便宜。

彼が住居は山に近い處から、其附邊に十數頭の猛虎が常に出没して居て、十日に一度は必ず誰か一人取搔はれてあつた。其處で彼は十數日目毎に肉一塊を買ふて來て、それを家の附近に置き、此肉を食べた者は當分決して人の生命を取らないやうにと上帝に禱を捧げて置た。處が流石の畜類も其恩愛に深く感じてか、其後は漸く人の生命を害することが少なくなつた。其時は虎が出て交扱て彼は時々用を帯びて泉城へ往復することがあつた。

るく彼を脊に負ふて泉城の郭外まで見送り、彼が歸る時は復た前のやうに彼を載せて家へ送り返して居た。

或年彼萬福山に遊んだ時、俄かに咽喉が渴て堪へられなかつたので、拳を以て傍の岩石を二つ三つ軽く叩くと、件の岩石は少しく一方に傾いて、其下から清い透るやうな泉が滾々と流れ出た。そして其泉は今に到るもなほ湧き出て居て、必何汲み取てもく曾て竭きたといふことがない、其處で世人は右の泉を聖泉と呼び、其岩石をば聖泉岩と稱して居たさうである。

此處に隔里といふ處に相公の廟があつて、郷人が之れに祈願を籠めれば願ひ事が立處に叶ふてあつたので、附近の人民は非常に之れを信仰して居た。然し其代りに年々三頭の牲を捧げて其神を祭らなければ、神徳少しも現はれず、人民の祈願も何等の効驗がない。そして神は右三頭の牲の中必ず其一頭を食べ、て了ふけれど、其際若し密かにそれを窺ひ見るものがあれば、神罰立處に其者の身に及ぶと言傳へられて居た。加之其は極めて猛惡な荒神で、年々一人の孩童を人供食に供へなければ、風雨頻りに起て五穀實らず、惡疫流行して神罰が何處迄及ぶか測知られなかつたので、人民共は毎年欠さず一人の幼子を神の供物に捧

げて居た。

嬰老人

四八六

然るに此處に八十餘になる一人の老翁が居て、それに唯一人の孫兒が居たが、或年人供食の番が其上に廻て来て、愈、其一粒種の孫兒を神に薦めなければならぬ事となつたので、件の老翁は泣く／＼孫兒を抱いて相公の廟に到り、其門前で頻りに別を惜んで泣き悲み居る處へ、會、嬰老人が通り蒐り、委細のことを精しく聞て愕然に思ひ、自ら老翁に代つて件の幼兒を抱き、燈火を覆ひ隠し、廟の祭壇の前に座して神の現はるゝのを待て居ると、頓て丑滿頃になつて、突然相公の像の口の中でゴロ／＼と凄しい響が起て、腥い氣が頻りに搖き出した。其處で嬰老人は急に隠し持つた燈火を取出して能く／＼檢めて見ると、相公の像の口の中に數多の臭蟲が蠢動して居たので、其翌朝熱湯を其口の中へ注ぎ込むと、件の蟲は悉く皆死んで了つた。それから後は神罰も一切息んで了つて、人民も大に安堵することを得たが、其れと同時に亦其神靈もバツタリと止んで了つた。

此處に泉城といふ處の人民は毎年中秋の夜になると、今年八十になる一人の老翁を推薦して、之れを橋の上に設けた高座に推据え、靜かに夜の更けるのを待て居ると、夜半になつて紅い燈火が二つ現はれて空を上下に昇降する。それを

見ると、其處に集て居た人々がそれ神が迎ひに來たと云て動搖き騒ぎ、件の老翁の子孫親戚に當る者共は其夜の主人側になつて、夥しい酒饌を設け、群集の人々へ御馳走することになつて居た。そして其時件の老翁の姿が何時の間にか消え失せて了ふのを見て、人々は全く昇天した者と思ひ、件の橋を名附て登仙橋と呼び、村の老翁達は其高座に上るのを以て此上もない名譽なことに思ひ、去年は誰れ今年は誰れと噂し合ふて、互に其者の幸福を羨んで居た。

然るに或年嬰老人が偶、其處を通り蒐つて之れを聞き、早くもそれは物怪の所爲であることを悟り、劍を抜て件の高座に上るや否や、折しも高座の上に近寄て來た怪しい燈火を目懸て唯一撃と斬りつけると、血が忽地座の上にサツと流れて、件の燈火は忽ち消えて了つた。

其處で彼は驚き騒ぐ群衆を制して、翌日地上に落ちて居た血の痕を釋ねて、其附近に聳えて居た清源山といふ山の麓の圖ある大磐石の下へ到ると、其處で今迄の血の痕が絶えて居たので、件の石を掘起して見ると、案の如く其下に一頭の大蛇が大傷を負ふて死んで居た。そして其傍に一の洞穴があつて、其中には夥しい白骨が積んであつたが、それは皆渠が此迄取て食ふた人間の骨である。

嬰老人

四八七

其後裴老人は清源山の岩窟の中で蛻骨仙化して了つたが、其時里人は土を以て其遺體の上を塗り蔽ひ、それをば石室の中に安置して厚く祀てあつたさうである。

張得一

張得一は台州の人である。初め彼は仙道は如何なものであるか少しも知て居なかつたが、偶然した事から道を悟るやうになつた。それは斯うである。此處に同じ台州に忻解元といふ者が居て、其家の後の嶺は山深く谷幽に、老木打茂て居て人跡の到らぬ處も多かつたが、或日一人の樵夫が山深く分け入ると、此處に一の小さい庵室があつて、中に一人の可なり年老つた仙女が住て居るのを見て、件の樵夫は大に驚き、急ぎ山を下て斯と忻解元に告げた。然すると忻解元は大に喜んで早速件の庵室の在る處に到り、暫時門前に行んで居て其行修の終るのを待ち、扱て行修も愈、濟んだ頃を見計て内へ入り、件の仙女の前へ行て禮拜した後、其生地と姓名と、それから何時頃から此處に住んで居たかを尋ねたけれど、件の仙女は一言も答へなかつた。次に雨風の漏らぬやうに此庵室を修復して

遣さうかと尋ねたけれど、彼女は矢張り黙て居る。其處で忻解元は直ぐと我家へ歸て來て職人を備ひ入れ、件の仙女の爲めに別に立派な家を建て、遣つた。けれど、件の仙女は少しも喜ぶ氣色が見えなかつた。

其時張得一は未だ若輩の少年であつたが、仙道を學びたい一念から兩親を振棄て、香を持て件の仙女に拜謁し、道を求むる切なる心を打明して自分如き者が果して道を修めて成就することが出來やうか如何かと尋ねると、此時件の仙女はさも嬉し相に始めて口を開き、心を潜めて怠らなければ成就せんことを疑無し、自分は今汝に數語を授けて遣るから、謹んでそれを持戒し、必らずく驕慢の心を起してはならぬぞといつて、次の數語を教へた。

心湛々として動くこと勿く、氣綿々として徘徊し、精涓々として運轉し、神混々として往來せしめよ。崑崙を七竅に開き、元氣を九竅に散し、玉關を鑿破すれば、神光方に顯はれ、寂然圓郭去來に一任す。

要するに欲情を去り、邪念を除けば、湛然たる本來の心が其處に光明を發して空寂々たる心地に住し、虛無恬淡の境に入ることが出来る。若し果して此境地に住することが出來れば、一舉一動總て道の玄理に合して、何をなすとしても意の

備にならぬものはないといふ意味である。
 之れを聞て張得一は忽ち大に悟る所があつたので、其儘家へ歸ると委細のこととを兩親に打明け、更めて兩親の許を請ふて再び家を出て、それから其處此處と諸國を遊歴して居たが、遂に其行衛が分らなくなつた。

梁野人

梁野人名は戴長沙の人である。彼の父兄は共に儒學を治めたけれど、彼のみは獨り仙道を學び、日夜研鑽して鉛汞修煉の術を得た。

此處に三清殿の後苑に一の銅像があつて、或日白晝彼は其下に憩ふて居ると、頻りに睡氣が催して堪えられぬので、不圖ウト／＼とすると、夢に長け一丈餘の金人が現はれ、右の手に一個の金貨を持ってそれを彼に與へ、汝若し錢が欲しいと思ふ時は左の手を袖の中へ突込み、劇しく手を振動かせば、錢は幾何でも欲しいと思ふ程出て來るであらう、但し此事は決して他人に漏してはならぬぞと言ふかと思ふと、其姿は忽ち消え去つて了つた。

扱て梁戴は夢が醒めてからもなほ心神恍惚として居たが、暫時經て漸う我に

返て見ると、左の手が微しく痛を感ずるので、熟々掌を視ると、薄茫乎と錢の形が其の上に現はれて居た。其處で試に左の手を袖の中へ突込んで、二三度劇しく搖振て見ると、忽ち錢が袖の中に一杯になつたので、彼は大に喜び、其の日は何喰はぬ顔して家へ歸て來た。而して其後彼は益々放蕩に身を崩し、到る處の酒樓に流連して居たので、彼の母は之れを見て大に心配し、兄の顔は幼少の頃から學問して進士の試験にも及第し、今は位高き身となつて居るのに、汝のみは益々放蕩に身を持ち崩すとは何たる淺ましいことであるぞと言て、時々彼を戒めて居たが、彼は母の言葉などは少しも念頭にかげ無かつた。而して其後良久經つと、彼は俄に家を飛び出して、諸方を遊び廻り、前後十二年計りの間は何の音沙汰もなかつた。

然るに彼の兄の顔は其時廣州の太守となつて居たが、或日突然弟の戴が訪ねて來たので、顔は大に喜び、早速酒を出して共に快く飲んであつた。其時顔は弟が身に縷縷を纏て居るのを見て、惘然に思ひ、新しい衣を出して彼に着せて遣ると、彼は稍不機嫌らしい顔をして、平生山林に生活して居る我々風情の者は、唯精神の修養を重んじて形骸のことなどは固より念頭に置て居ない、美しい衣、美し

い邸宅等は我々から見れば恰も糞土にも劣つた物であると言て、兄が親切に留むるのを振拂て其處を辭し、其夜は圖ある旅舎に泊つた。

然るに其夜半になつて、戴の座敷で夥しく金錢の響がするので、宿の主人は不審に思ひ、彼をば的切り盜賊の類と思込み、竊かに其座敷を覗いて見ると、別に何のこともなく、戴は酒に酔ふて快く其處に寝て居た。然し主人が此方へ歸て來ると、再び戴の居間で、前の如く金錢の響がするので、再び行て其居間を覗いて見ると、矢張り何の變事もない。其處で主人は益々不審を抱き、翌朝戴が起出て立去るや否や、急いで件の座敷へ駆け込んで見ると、驚いた、壁の側に黄金が夥しく積み重ねてあつて、其上に兄の太守に宛てた手紙が一通添へてあつた。そして其手紙の中には、自分は野に育つた人間で、松風蘿月は即ち自分の無二の伴侶で、天にある青空は即ち自分の爲めの屋蓋、大地は即ち自分の寢床である。氣が向けば、何十年と其處に留るけれど、一度嫌になつて來いば、十年の住家も、幾履の如く捨て、復た他の氣に入つた場處を探し求める。斯の如く自分は今日は東、明日は西と流れ歩く浮萍の身で、固より一定の住家もなければ、自分のことは今日限り長く思切て、唯國家の爲めに長く自愛せられんことを望む。扱て又此處に積

趙瞿

んである金は夫々貧民に施して貰いたい。それから又自分の是迄愛用して居た弊衣を此處に脱ぎ捨てあるから、是れを自分の形見として永く取て置て呉れるやうに書き認めてあつた。

而して彼が脱ぎ捨てた弊衣を視るに、散々に裂け破れて居るけれど、一種言ふに言はれぬ佳い香氣がして、如何にも世間普通の物とは異なつて居た。そして其後彼の室を熟々檢べて見ると、屋根の瓦が二三枚剥き取られて居て、如何やら彼は其處から天上へ飛昇したらしい形跡があつたといふことだ。

趙瞿は字は子榮といひ、上黨の人である。或年癩病にかゝつて餘命も長くはあるまいと思はれた。其時彼の親達は彼に家で死なれては其毒子々孫々に傳へて永く一家の瑕疵となるからといふので、或日彼を山の中へ連れて行き、一個の石室を作って、虎狼の襲撃を防ぐ爲めに丈夫な材木を以て周圍を取圍み、一年間丈け食べる食料をあてがつて、彼をば獨り其山奥に打捨て、皆々家へ歸つた。其處で趙瞿は深く自分の身の不幸を嘆き、餘りといへば、無慈悲な兩親の仕打を恨

んで、日夜獨り泣き悲みながらも、幸に虎狼の害もなく、終に百日が程、其處の山中に留て居たが、或夜のこと、石室の前に三人の異人が現はれ、彼を見て怪んで何者であるかと尋ねた。其時彼は斯様な山奥に人が住んで居る筈がないから、これは大方世に謂ふ仙人の類であらうと心の中に思つたので、一伍四什を審しく物語て、自分の不幸を救ふてくれるやうに哀願した。其時件の異人共は風の如くスーと室の中へ入つて来て、松の實や、松脂等各五升程を彼に與へ、是を毎日煎して飲んで居れば病が忽ち癒るのみならず、不老不死の法を得る事が出来る、但し此藥を半分程飲めば、汝の病は跡形もなく愈つて了ふであらうが、然しそれと止めてはならぬ、藥がある中は一滴でも残しては悪いからと事細に其方法を告げ、何處ともなく又立去て了つて。

其處で趙聖は異人から教はつた通り、毎日其藥を調劑して飲んで居ると、病が次第によくなり、藥を飲み盡くした頃には身體が舊に倍して強健になつたので、或日山を下りて自分の家へ歸て來ると、家人共は彼を見て一概に死靈が來たものと思ひ、大に驚き怖れて逃げ隠るゝものもあつた。然し、彼はそれを制して事細に始めから終りまで話して聽かせたので、家人も漸う安心し、更に彼の病の治

つた事を大に喜んだ。

其後二年計り經つと、趙聖の顔色は次第に若々しくなり、肌膚なども光澤を増して、一寸見ると十七八才位の少年の如くであつた。そして其舉動は非常に軽く、走る時には飛鳥の如くて、眼にも留まらない程であつた。年七十餘になつたけれど、齒は一つだつて欠けたものはなく、如何んな堅いものでも容易に嚼み碎く事が出来、又餘程の重いものでも脊に負ふて遠い處に旅行するに少許も疲労するといふ事はなかつた。

年百七十歳になつた時、或夜彼獨り室の中に寝て居ると、天井のあたりに鏡程の大きな光が見えるので、左右の人々を呼んで、彼物は何んだと問ふて見たけれど、彼等の眼には其光が見えなかつたさうである。其後又或夜寢室が燈火でも點けたやうに明るく、そして何物か自分の鼻の上に立て居るので、熟々見ると、それは丈け三寸程の美しい二人の少女で、自分の鼻の上で遊び戯れて居るのであつた。暫時すると件の少女の丈は漸々に大きくなり、やがて普通の身の丈位になつた。そして何處ともなく琴瑟の聲がして、笑ひさゝめく聲が漏聞えて來たが、曉方になると、件の琴の音も笑ひさゝめく聲も止んで了つて、彼の異しい少女

劉政
四九六

の姿も何處へか消えて了つた。
其後趙翌はなほ百五十六年計り長生して居たが其後山へ上つて其行衛が知れずになつて了つた。

劉政

劉政は沛の人である。幼少の頃から學問を好み、百家の書で悉く精かないものはなかつたが、其後仙道の尊い事を知て、それより仕官の途を絶つて一向黄老の道を求め、少しても自分より優て居るものがあると聞けば、千里の遠い所でも早速出掛けて行つて其人について其教を聽いて居た。そして平生最も好んで墨子の五行記を讀んで居たが、兼ねて又朱英丸を服し、年百八十餘になつたけれど、容顏美しくして恰かも少年のやうであつた。

彼は種々の法術を能くして居た、即ち隱形の法を初めとして、自分の身體を數千の人間に分形する事や、或は三軍の兵士を變じて一の林となし、又は鳥獸を使役して他人の知らぬ間に其器物を奪ひとつて他處に置き換へさしたり、或は果實の種子を地に播て、忽ちの間に發芽し、花を開き、實を結ばしめたり、或は何處か

らともなく突然數百人分の酒肴を取寄せたり、其他呼息を吹けば大風起て來て砂を飛ばし、手を擧げて物を指せば、山は崩れ、木は倒れ、川は逆流して家は壊れる、然し再び之れを指せば即ち舊の通りになる。又物を變じて或は美しい婦人の姿となし、或は恐ろしい異形の姿を現せしめ、又は何も無い處に突然火を發したり、水を湧き出したり、其外神變不思議の術一々之れを擧げつくす事が出來ぬ。斯様にして彼は種々の奇術を行ふて世を濟ひ民を恤あはんで居たので、人民からは恰かも神のやうに尊敬せられて居た。處が或日彼突然姿を隱した儘終に行衛が分らなくなつて了つた。

張先生

張先生は貴池の人である。幼少の時一人の異人に逢ふて仙術を授けられ、齊の國の山中に草廬を構へて其處に住んで居た。

彼は平生極めて無口な男で、終日唯室の中に端坐して神を煉ることに勉めて居たが、頭髮は黒く光澤があつて漆の如く、肌理は艶々して居て玉を並べたやうであつた。而して宋の政治年間に尸解仙化して了つた。

此處に汚陽けんやうといふ處に蕭行美といふ者が居て、年九十餘になつたけれど、孜々として道を修むることを廢しなかつた。そして或日對融山に遊んで一人の老人に逢ふたが、其時件の老人は自ら張先生と名乗り、傍の路側に生えて居た一叢の草を指して、若し此草を持ち歸て之れて鐵を煮るならば、化して銀となすことが出來ると告げ、而して最後に唯此事を決して他人に悟られないやうに注意せよと戒めた。

其處で彼は教へられた通り、件の草を持歸て自分の庭に栽え、其葉を刈取て鐵を煮るに、果して皆化して銀となつた。

然るに此事雖云ふとなく、廣く世間にひろまつてあつたが、然すると、或晩俄かに風雨が起て、何時の間にか庭に植えて置いた件の草を何處へか押し流して了つた。其處で彼は再び彼の對融山へ上つて件の草を探し求めたけれど、如何した故か、囊には彼程多かつた草が今は一本も見當らず、空しく山を下て來てあつたさうである。

支那仙人列傳

支那仙人列傳終

明治四十四年一月四日印刷
明治四十四年一月七日發行

(正價壹圓參拾錢)

支那仙人列傳

不許複製

著者

東海林辰三郎

發行者

田中增藏

印刷者

島連太郎

印刷所

三秀舍

東京市本郷區龍岡町三十四番地
東京市神田區美土代町二丁目一番地
東京市神田區美土代町二丁目一番地

發行所

(振替口座東京)
三〇五八番

電話(四〇七九番)
下谷(二六七二番)

聚精堂

東京市本郷區龍岡町三十四番地



支那

笹川臨風氏校訂 (石井柏亭畫伯裝幀)
譯註 醉古堂劍掃

册一全
郵正價金八拾五錢

法學士 柳田國男氏著
石神問答

册一全
郵正價金八拾五錢

三上文學博士序 長尾藻城 川口刀水氏合輯
隨頭附註評論
寄せしに 柴野栗山の書簡

册一全
郵正價金八拾五錢

露國文豪ゴロッキー原著 昇曙夢氏譯
脚どん底

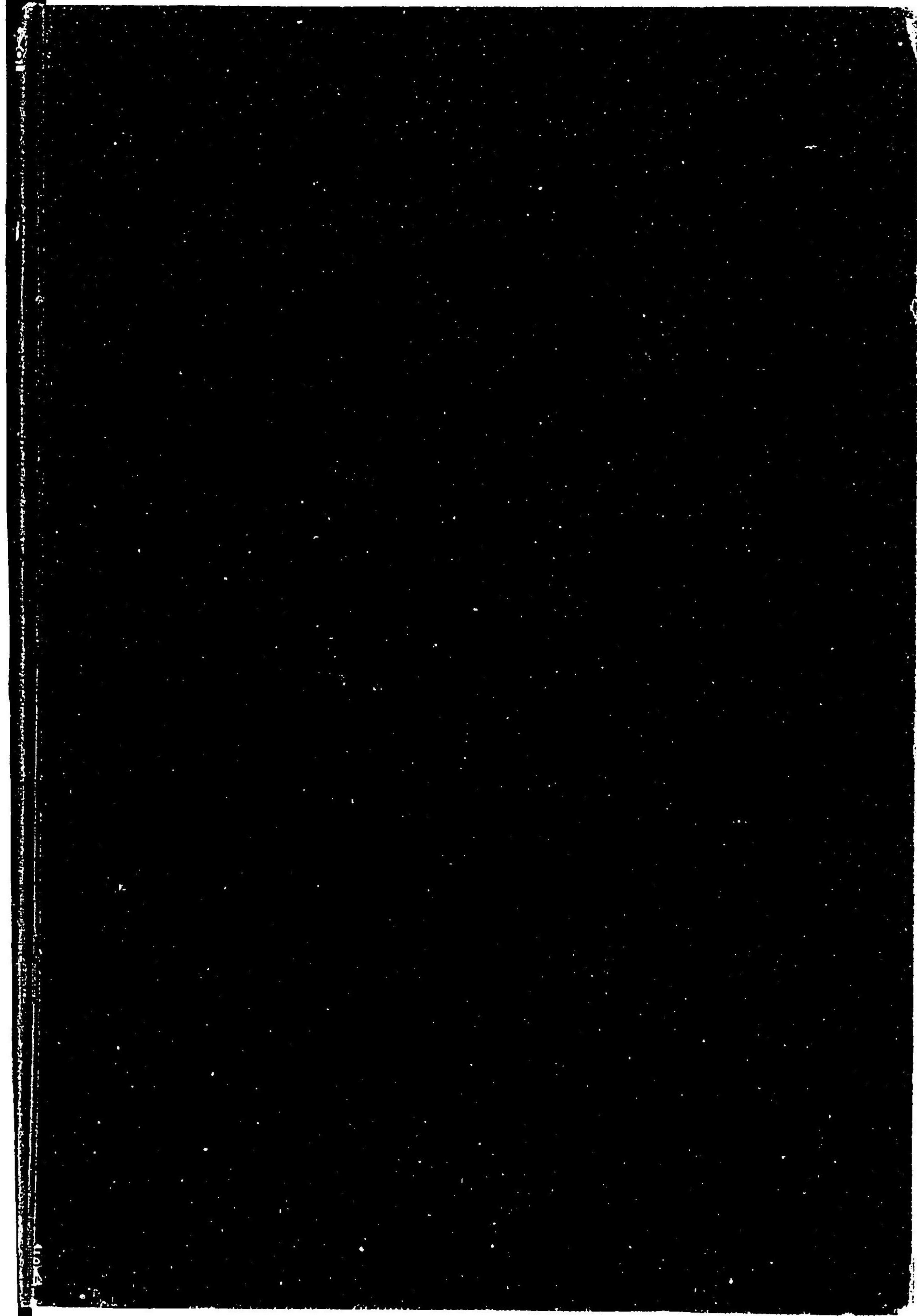
册一全
郵正價金九拾五錢

發行所

東京市本郷區龍岡町
振替東京三〇五八番

聚精堂

SHIKATA SHUNDŌ
BOOK ANTIQUARY
OSAKA
松田 商店



013593-000-6

334-45

支那仙人列伝

東海林 辰三郎 / 著

M44

ABA-0062



